2月

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2015年
2月号
No.620

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2014年
2月号
No.608

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2013年
2月号
No.596

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2018年
2月号
No.656

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2017年
2月号
No.644

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2016年
2月号
No.632

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2021年
2月号
No.692

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2020年
2月号
No.680

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2019年
2月号
No.668

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2024年
2月号
No.728

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2023年
2月号
No.716

いけばな
桑原専慶流
テキスト
2022年
2月号
No.704

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
2月号
No.596

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

母のもとへ

昨年、十二月十八日に亡くなりました父仙齋の本葬は、一月十九日に廬山寺にて執り行いましたが、大変お寒い中を大勢の皆様にご参列を賜り、厚く御礼を申し上げます。

父は昨年五月下旬に大動脈瘤の手術の為に入院の後、肺炎によって入院が長引くなかで最期は腎不全が原因で亡くなりました。八十五才でした。

入院中は本人もかなり辛い思いをしましたので、きっと母が「もうこっちに来て」と、父を呼んだのだと思います。今頃はどこかの星で、母と再会し、仲良く話に花を咲かせているでしょう。

父のいける花には、何とも云えない不思議な魅力がありました。色彩にこだわりがあり、ときに繊細で、かつ非常に強い父のいけばな。私は父のような不思議な魅力が出せるところにはまだまだ至りませんが、花をいける心の手がかりは、しっかりと手渡してもらいました。

父が目指したものを引き継ぎ、私達家族、そして桑原専慶流一門の皆さんと共に、いけばな文化の向上と、より良い社会をつくるために力を合わせてまいりますので、今までと変わらぬおつきあいを賜りますよう、お願いを申し上げます。

桑原仙溪

本葬で芦田一馬先生に賜ったご弔辞を、先生のお許しを得てここに掲載させていただきます。

弔辞

遠州流宗家
貞松斎　芦田一馬様

故桑原仙齋先生の御霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

仙齋先生、そうお呼びするよりは私には隆吉先生、いや隆吉さんとお呼びする方が一番親しみを感じる呼び方です。

貴方と初めて出会ったのはそれはもう五十年近くの昔、私が遠州流の宗家を継承するにあたり、初代の京都いけばな協会会長をつとめられていたご尊父専溪先生にご挨拶に上がった日、貴方は門前で何かご用をなさってました。

それ以来の永い長いおつきあいでした。

まだ家元でなかった隆吉先生も若く、私もより若い時代、京都、大阪の先生共々、古典いけばな勉強会を立ち上げ、ご尊父専溪先生のご指導を受けたことも今では懐かしい想い出です。

懐かしいと云えばよく呑みましたね。呑んだと云うよりは、美味しい肴でチビィチビィと飲んだ想い出はありません。酒豪を通り越して貴方の呑みっぷりは正気を少しばかりはずれ、日本酒でも洋酒でもコップに一杯ついで一気、私も負けずに飲み、酔った勢いで店の駐車場で相撲をとり二人そろっておでこを擦り剥き、又、次の呑み屋にと。

私が元気な時は貴方を背負い、愛妻素子さんの待つ自宅まで送るのですが、入口までに階段があり、何故か最後の一段がやや高く、いつもそこでけつまずきそうになりながら、入口までたどり着くと、そこには「又お前が飲ましたな」と私を見つめる素子夫人の姿がありました。

そんな隆吉さんは当然の結果のように胃潰瘍をわずらい、治療入院となり、退院後の貴方はあびるほど呑んでいた酒をピタとやめ、以来どんな宴席でも一口たりと口にすることはなくなりました。全く強い意思でした。

そんな反面、貴方は若い時から花をこよなく愛し、いけばなの道を追求され、関西グループという研究グループに属され、私も阿吽の会というグループで若い先生方といけばなの勉強を続けました。

（財）日本いけばな芸術協会でお互い理事と云う立場、いけばな文化の普及発展に微力をつくし、又京都いけばな協会では華道京展の運営に携わり、先代専溪先生に続き七代会長の任につかれ、数多くの協会事業の先頭に立たれ活動されました。

又ひろく海外にも目を向け、イケバナインターナショナルの京都での世界大会もデモンストレーションをはじめ大活躍。自らも海外に出かけ、世界各国でいけばな文化の紹介、普及に努められ、中でもドイツには毎年のように流門葉と共にいけばなの指導に行かれ、その努力は現家元に受け継がれてきております。

家元を和則先生にゆずられた貴方は愛妻素子さんに先立たれ、口には云えぬ淋しさであった事と思われます。

それでも貴方はいけばなの研究をおこたる事はなく、お送りいただく流誌に花材の事、器の事、又自然に対する種々の想いを掲載され、その博学ぶりは私を感動させて毎号楽しみにしておりました。

京都や大阪での花展にお孫さんと共に見に来られる貴方と控室でお話出来ることを、楽しみ喜びにしておりましたのに、昨年の京展で終わってしまいました。残念、残念、たまりません。

両切りの「カンピー」を手元から離さず、イキなツイードの洋服。カッコいい帽子、靴まで、慶応ボーイの貴方は華道界ではカッコ良すぎでした。

現家元仙溪先生は今は日本いけばな芸術協会の理事であり、京都いけばな協会の副会長をつとめ、いけばな以外でも料理の分野でご活躍の櫻子さん共々大活躍。又家元を支える多くの流門人の皆様方。皆、皆に愛された仙齋先生、隆吉さんとの別れは口には云えぬ悲しみと寂しさで一杯です。

いけばな作品のように限られた時間の中を自由に楽しく又厳しく生きてこられた先生。天国で素子夫人と美味しい料理を食べ、花について語り合っていられることでしょう。眼鏡の奥でにっこり笑い、よおっと手を差し伸べる貴方の姿を忘れることはありません。

仙齋先生、隆吉先生。心よりご冥福をお祈りして、お別れの言葉といたします。

<表紙の花>
青麦　ポピー　晩白釉　蜜柑

<3頁の花>
青文字　チューリップ

解説は9・10頁

球根のままで

主材　雲竜梅（薔薇科）
副材　喇叭水仙（彼岸花科）
　　椿（椿科）

花屋で小型の喇叭水仙の鉢植えを見つけたので一鉢買って帰り、球根ごと鉢から抜いて土を洗い落とし、そのまま剣山にさしとめていけてみた。

切り花ではここまで小さな喇叭水仙は売られていない。鉢植えの花には切り花にはない自然味があるので、ときどき買っていけているが、この喇叭水仙のように、鉢から花を切っていけると短すぎていけにくい場合などに、根ごと、球根ごといけるという選択もあっていい。

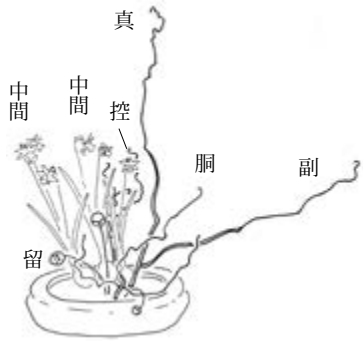
こういう使い方を「根洗い」と呼んでいる。

このいけばなのもともとの発想は、中国の正月に飾られる球根水仙を思い出して、球根ごと景色花として使ってみたくなった。

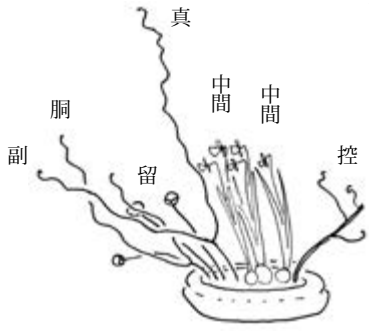
ところが、いざいけてみると、球根の部分はまともに見えない方が良さそうなので、椿の葉で隠すことにした。

とり合わせた雲龍梅は喇叭水仙に合わせて短めに切り、竜のような枝姿がはっきりと見えるような場所に出している。雲龍梅はとても香りがいいので、咲くのが楽しみである。

盛花斜体副主型（逆勝手）



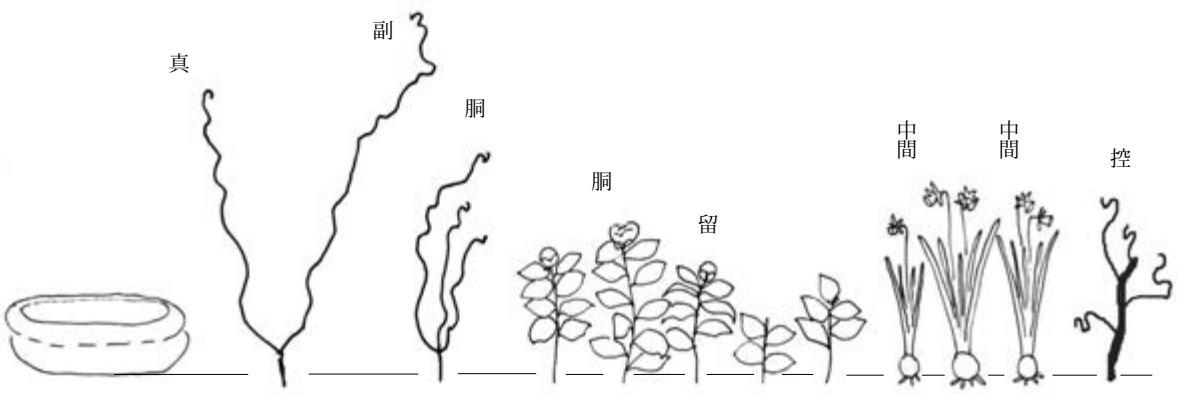
横から見たところ



①喇叭水仙をいける空間をイメージしながら、雲龍梅を剣山にとめてゆく。
枝分かれを切りはなすと自然味がなくなるので、真と副の位置にくるように工夫してとめている。足もとの太い幹にも小枝に花の蕾がついていたので、後方へ挿し加えた。

②喇叭水仙を鉢から球根ごと抜いて、バケツの水で土を洗い落としておく。
球根を剣山に少しさしてとめてゆく。
足もとに椿を加えると水際がおちつく。（4頁の花）

それぞれの長さ



花器の水際

ビル街の中心に花の山居

いけばな桑原専慶流は江戸初期の元禄期。立花の名手とうたわれた桑原冨春軒仙渓を流祖として、300年の伝統をつなぐ華道の家元。本拠（邸宅）のある界隈は銀行や百貨店、ホテルなどの大型ビルが林立するオフィス街で、家元のある六角通は呉服などの糸偏ビジネスの町である。その中でおよそ半間ほどの格子戸の横に「桑原専慶流」の表札を掲げる家元の控えめさがいっそ潔い佇まいである。

格子戸の内側は清らかに水打ちされた石畳の露地が30メートルほど延び、そのアプローチに促されて左に折れると光が差し込む坪庭。花の養生のための水溜めがあり、二輪の清楚な花が浮かぶ。訪れる人を迎えてくれる花である。さらに奥へ進むと、また庭がある。小ぶりながら手入れの行き届いた清浄な茶庭が風を運ぶ。元、おくどさん（かまど）のある台所だったという玄関から座敷に上がると、縁側越しに緑が目に飛びこむ。いったい、いくつ庭があるのかと思うほどこの家は小さな自然に囲まれ、ビルの真ん中とは思えない静けさで、“つぼ中の天”とか“市中の山居”とも言える風雅な別天地である。磨きこまれた美しい町家の随所に、その場に適った花たちがさり気なく生けられ、少し、禁欲的な京の町家に文字通りの花を添えている。侘びた茶の湯の山居というよりは、明るい花の山居である。

「庭でも家でも、日々目を注ぐことが大切ですね。こんな小さな庭でも季節になれば芽を吹くし、100年経った家でも細やかに掃除をしていれば傷んだ所にも目が届きます。母の口癖ですが、悪くなってからではあかん。早め早めの手当が草木でも家でも、もちろん人でも必要なんやと・・・」と櫻子さん。

自然だけでなく、家や人にも注がれるその思いは、いけばなとどのような関わりがあるのだろうか。

花を生けることは花を生かすこと

「花ってお料理と通じるところがあると思う」と櫻子さん。野菜であれ、魚であれ、自然から頂戴するものの扱い方の共通点だと言うのだ。

「お花のお稽古に来る方々にもよくお話しするのですが、どうか、花を生けようと思わないでくださいと。上手く生けようとする前に、その花の生い立ちとか、文化的な背景なども考えて、花を生かしてくださいと言っています」。

これは、当家元の創始者・桑原冨春軒仙渓が著した『立花時勢粧』以来の桑原家の家訓ともいえる理念で、植物の出生や生い立ちを深く観察することで花や木の自然の姿を思い描き、それをいけばなに取り入れ、花を生かすというもの。櫻子さんはそれを「花と話をして、心通わせ、花に学ぶこと」だと言う。なるほど、これは料理と通じる。そして、この美しい住まいもまた、その教えを代々伝えてきた家であればこそ、柱にも壁にも温かい目が注がれているのがよく分かる。

西日本新聞 12 月 21 日　広告面「京晴れ MIYAKOBARE」より

桑原櫻子

桑原専慶流副家元

紅葉も散り果て、花も枯れる冬。
そんな季節であればこそ、
草木は健気な営みを見せる。
華道家であり、料理研究家でもある
「いけばな 桑原専慶流」の副家元 桑原櫻子さんに
冬の京都の魅力についてうかがいました。

明日のために日々「備え」を続ける自然。その営みに気づくことも、いけばなの魅力。

◎くわはら・さくらこ＝1960年京都市生まれ。両親は華道桑原専慶流の14世家元夫妻。祖父にいけばなの指導を受け、21歳で副家元を襲名し、古典いけばなの生花、立花を今に伝える。国内外で精力的に活動。京都の家庭料理に関する著作やテレビ番組講師などでも知られる。

ところで、華道の副家元としてだけでなく、料理と花のサロン“チェリー・キッチン”を主宰する櫻子さんは料理研究家の顔も併せ持つ。

「花と同じように、貴重な自然の恵みを調理する時は、その素材の生い立ちを考えて、季節感のない食材やインスタント食品などとはなるべく組み合わさないように心がけています。華道家として花の命を生かすことと料理研究家として素材の味（命）を生かすことはまったく同じ」と言う。

人をもてなす花や料理の専門家である櫻子さんは、花や野菜などの素材だけでなく、その優しいまなざしを人にも注ぎ、京言葉で言う“はんなり”、（花のある）人柄とも相まって、心和む魅力的な京女である。

冬の自然が教えてくれる花の生け方

6歳からいけばなを始め、自然の命を尊ぶ家風を身につけた櫻子さんにとって、すべてが寂び枯れていく冬という季節はどのように映るのだろうか。

「華道家にとって冬は、とても勉強になる季節なんですよ。花も葉も落ち、幹と枝だけになった木はいわば、その木本来の姿。どのように枝を広げているのかがよく見える季節です。私どもの流派の生花も、じっと自然を観察して出来た型なのです。その意味で、松や銀杏（いちょう）、蝋梅（ろうばい）、梅や桜も風格ある大木の多い「京都御苑」は私の勉強場所。ああ、こういうふうに生けるのね、って感じです」と櫻子さんは言う。冬の御所に落ちている松ぼっくりや黄金色の銀杏の葉を「頂戴するのも楽しみ」と笑う。

「ほかには、嵐山の渡月橋から見る大堰（おおい）川、三条大橋から鴨川の向こうに望む北山など、大きな風景を見るのも好き」だとも。

「わが家の庭をよく観察していると、小さいながら懸命に生きている自然の営みがよく分かります。とりわけ冬は、花も実もないように見えますが、すでに花芽をつけ始めているのです。開花の準備をしているのですね。人も自然のこういう営みに学ばなければいけないと思います。何ごとにも“備える”という日本人ならではの真面目さや細やかな感覚も、実は先人たちがきちんと営みを繰り返している自然から学んできたのではないでしょうか。“備えあれば、憂いなし”ということわざがありますが、それは災害だけでなく、家事でも仕事でも勉強でもすべてに通じる心構えだと思っています。何でも簡単で便利になった現代人は、それを忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えているし、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと段取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります」。

いけばなを通じて身につけた、桑原櫻子さんの自然観と生活感である。

いけばなの大事なことをお話しておりますので、転載させていただきました。

雪柳　チューリップ

花型　二瓶飾り
花器　主瓶　煤竹竹筒
　　副瓶　結晶釉小型水盤

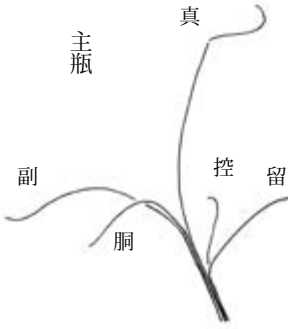
春の生花二瓶飾りの作例。

雪柳は折れやすいので、もともとの枝の湾曲を生かすようにする。

いけたのが一月なので細枝で形をつくるのに苦労したが、太枝にたっぷりと花のついた雪柳を見つけていければいけやすい。

その場合、花屋で枝を選ばせてもらえるなら、上方でよく曲がった枝を、右向き左向きを組み合わせて買うといけやすい。

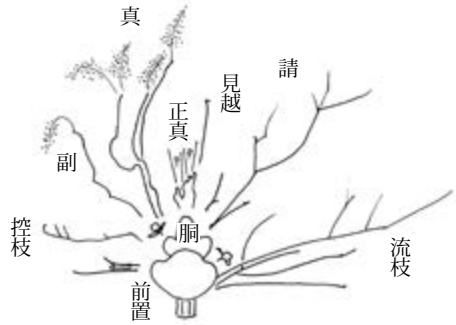
チューリップはできれば小型の、葉がしっかりしたものを選びたい。葉が柔らかいと、生花にはいけられない。



南天真の立花　仙溪

年末年始に京都駅前に飾った立花。強風で向きが変わって困った。途中で黒いテープで花器を敷板に固定し、以後は動かず。野外は大変だが好評だったそうで、京都ならでは。

真・副　南天
請・流枝　臘梅
正真　水仙
見越　苔木
控枝・胴・前置　松
あしらい　椿ほか



花のおくゆき（3頁の花）

上の写真は３頁の花を右横からみたところ。
青文字の花の蕾を集めるために、前方へ枝を傾けて出している。
青文字の枝の見所を花器よりも前にもってゆくことで、花型に奥行きを与え、チューリップの空間を大きく空けている。

似たもの同士で

＜表紙の花＞　櫻子

毎年飾らせて頂く晩白柚（ばんぺいゆう）。ザボンの仲間だが、大きいものは五㎏ほどあり重さも世界一らしい。厚い皮に包まれているので中身の果肉もいつまでも瑞々しいし、長く鑑賞しても最後まで美味しくいただける。熊本・八代市から届いた本当に有り難い果物。一月に干支の置物と晩白柚を飾り静かに新年を迎えさせて頂いた。

このテキストにはポピーと青麦、蜜柑を取り合わせた。みんな真ん丸で可愛いらしい。早春の彩りと香り。同じ部屋なのに、急にぱっと明るくなった。

花材　晩白釉（蜜柑科）
　　蜜柑（蜜柑科）
　　ポピー（罌粟科）
　　青麦（稲科）
花器　長方形陶水盤

花曜会

＜3頁の花＞　仙溪

毎月一回の花曜会は、いけたい花をいける自由花の研究会。八年前に母が亡くなった翌月から、父は指導側ではなく、自分も一作花をいけてくれていた。何をどんなふうにいけていたか、手元に記録を残してある。昨年一月には濃紺の深鉢に青文字をかため、薄紫のスカビオサと黄色のスプレーの糸菊をのぞかせている。「ちょっと色がぼけたかな」と云っていたが、その時の青文字の扱いは鮮明に覚えている。追憶の花。

花材　青文字（楠科）
　　チューリップ（百合科）
花器　緑釉深鉢

エゾノキヌヤナギ

＜10頁の花＞　櫻子

この蝦夷の絹柳は、まだ寒い間にすでに芽鱗片を脱いで花穂が膨らんだ状態で花屋にでてくる。温かそうな可愛らしい花穂なので、春の明るい色彩をとり合わせたくなってしまう。つい撫でたくなるような花穂だが、頬にあててみるととても気持ちがいい。見ても触れても癒される。

花材　蝦夷の絹柳（柳科）
　　ヴァンダ（蘭科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶水盤

ヒヤシンス

＜11頁の花＞　仙溪

ヒヤシンスを球根のままでいけている。ヒヤシンスは地中海東部の原産だが、地中海沿岸は夏に雨が少なく冬に雨が多い冬雨型の気候なので、夏の間は球根で休眠し、秋から春の間に生育、開花する植物が多い。例えば水仙、チューリップ、シクラメンなども同じく地中海沿岸に分布している。

ヒヤシンスは丈が短いので、デンファレとの二種いけにして、花を目立たせた。

花材　ヒヤシンス（百合科）
　　デンファレ（蘭科）
花器　濃紺ガラス花器

桑原専慶流いけばなテキスト596号　2013年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五二五円　http://www.kuwaharasenkei.com

雛の花　櫻子

お雛様の横に飾るいけばなは桃と相場が決まっているが、桃のかわりにいけるなら、スイートピーなんかもよく似合う。白色を男雛、ピンク色を女雛のイメージでいけ、葉の緑色とポイントとしての赤色にチューリップを加えた。他には青麦も何故だかよく似合う。どんな花が似合うか、いろいろ試してみよう。

「仙齋彩歳」

「ホッホチャンとケンチャン」はテキストの裏表紙に連載していた工作花を一冊の本にまとめたものだ。毎回工夫された母の花に、父が絶妙の文章を添えていた。

母が亡くなった翌月から、父はテキストに「仙齋彩歳」の連載を始めた。この八年間に約九十の「仙齋彩歳」が掲載されたが、父の文章のファンという人も多く、一冊の本にまとめることにした。

読み返していただくと、父がどんなふうに過ごしていたか、どんなことを考えて花をいけていたか、その手がかりを感じることが出来るはずである。

忌明けに間に合わせるため、各号に個別のタイトルをつける余裕がなかったので、掲載年月とテキスト号数をタイトルにし、父のいけばなとスナップ写真も加えて編集した。

父のメッセージが詰まった一冊。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014年
2月号
No.608

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

四君子

＜表紙の花・3頁の花＞　仙溪

この二作の小品投入はどちらも季節の花木に蘭を取り合わせている。東アジアの木と東南アジアの蘭の組み合わせだ。

梅と蘭といえば「四君子（しくんし）」が思い当たる。四君子とは、蘭、竹、菊、梅の四種を、草木の中の君子として称えた言葉である。

君子は徳と学識、礼儀を備える。蘭、竹、菊、梅はその姿や性質から高い気品が感じられるため、中国宋代以降の絵の画題にされることも多い。また、この四種の草木を描くことで基本的な筆遣いすべてが身につくと言われている。

四君子として描かれる蘭は春蘭で、清楚でよい香りのする小輪の蘭である。しかし、作例の胡蝶蘭もバンダも、それぞれに美しい品格を備えている。孤高な凛とした強さが感じられる。それゆえに、梅や蠟梅のように香り高い気品ある花木との相性がよいのだと思う。

厳しい寒さの中で咲く梅や蠟梅に蘭をあわせると文人趣味を感じるいけばなになり、同じ蘭と春の桜の組み合わせでは、優しい華やぎが感じられる。

二作とも撮影のあと、冨春軒初春の会で座敷に飾った。新年の言祝ぎの場によく合っていた。

＜表紙の花＞
花材　蝋梅（蠟梅・臘梅）
（蝋梅科）
ミニ胡蝶蘭（蘭科）
ミリオクラダス（百合科）
花器　陶花瓶（竹内眞三郎作）

＜3頁の花＞
花材　紅梅（薔薇科）
バンダ（蘭科）
ミリオクラダス（百合科）
花器　陶花瓶（竹内眞三郎作）

古清水の器

＜2頁の花＞　櫻子

松竹梅の舟鉢に蘭（オンシジウム・オブリザタム）とシクラメンをいけた。

この器は古清水（こきよみず）写しの器。古清水とは江戸時代前期に確立された焼きものである。清水焼に磁器が登場する幕末期以前の焼きものをこのように呼んでいた。

京焼の野々村仁清（にんせい）を起源とし、優雅で美しく、その当時のお公家さんの好みや宮廷文化の影響がある。それまでは茶道文化の影響で侘び寂び的な焼きものが多かったこともあって、華やかなものへの要望も強く、色絵や絵付けの美しい器が作られている。

京焼清水焼は今も同じ技術で引き継がれ次の世代も育っている。

花材　オンシジウム・オブリザタム
（蘭科）
シクラメン二種（桜草科）
花器　古清水舟鉢

散歩道

岡山県倉敷市の美観地区は観光客が多く訪れる人気のスポットだ。

倉敷にはよく行くので、時間が空けばぶらぶらと散歩を楽しんでいる。

ゆっくり時間があれば、大原美術館や児島虎次郎記念館で芸術に触れるのがいい。児島虎次郎の油絵は温かな優しさがあって心が癒やされる。

時間があまりない時は美観地区の北側の倉敷本通りを往復してから駅まで歩く。最近通りが整備されて、夜は灯りの演出も素敵である。

歩いていると、ある家の外壁から何やら見つめられている気配を感じた。それは手作りのいけばなの額であった。木枠に陶器の花器が固定されて、椿が一輪いけてある。遊び心が洒落ている

銀色に輝いて

〈4頁の花〉　櫻子

日を増す毎に花芽が大きくなり銀色に輝いてきた。初春の会での迎え花にいけた赤芽柳と薔薇、胡蝶蘭の盛花。赤芽柳は20本だが、枝分れも数えると40本ほどになると思う。

三彩釉の水盤は、花材を沢山用意していけ終えても、足りないかな?と思うくらい大らかに包み込むような大きな器だ。清水保孝さんの作品だが、花器として作られたのだろうか。それとも大鉢だろうか。私としてはいつも沢山の本数が挿せて有り難いと思って花をいけさせて頂いている。

狂言の中の立花　仙溪

「真奪」しんばい

作者　不詳
場所　京都東山（大蔵流）
　　京都深草（和泉流）

■あらすじ

シテ（主役）は太郎冠者、アド（脇役）は主人と通りがかりの男である。

主人と太郎冠者は、立花に使う真（中心となる枝）を取りに出かけ、良い真を持った男に路上で偶然出会う。

太郎冠者は男の真を奪うが、逆に主人の太刀を奪われてしまう。

主従は男を待ち伏せして捕まえるが、太郎冠者は男を縛る縄を悠々と綯い、その上あやまって主人を縄で縛ってしまう。「ぬすびとを見て縄をなふ」ということわざを舞台化した趣向。

「真奪」の時代背景

室町時代のたてばな

立花に使う真を取りに出かける、とあるが、狂言が成立した室町時代にはまだ立花とは言わずに「たてばな」と呼ばれるシンプルな様式であった。たてばなは真を中心に立てた足元に何種類かの下草を加えて構成される。

室町時代に、はたしてたてばなの真を取りに山へ出かけるということが一般的だったのだろうか。東京富士大学教授・網本尚子さんの「狂言に描かれた花『真奪』の考察を中心として」を参考にして、室町時代の花事情をのぞいてみる。

室町時代において、現在の生け花の源流にあたる立花（たてばな）が流行していたことはよく知られている。しかし、狂言でたてばなを題材とした作品は、実は「真奪」一曲しかない。

室町時代には、前代の寝殿造りが変化発展し、書院造りという建築様式が成立する。書院作りの中心は書院で、ここが対面所となるのだが、書院の主室の上段の間の背後には押板、違棚、付書院などが設けられた。

押板には三幅対の画幅が掛けられ、その前にはお供えするように三具足（香炉・花瓶・燭台）を置き、その左右に一対の花を立てた。また、違棚には上段・中段・下段ごとに、小花瓶を置いたり、口の広い花器を置いたりと、工夫をこらした花の立て方がされ、付書院には小花瓶を置いたり、釣花瓶や柱花瓶を置いたり、かなり自由に立てていたようである。この中で中心となり、最も重んじられたのは、三具足の花であった。

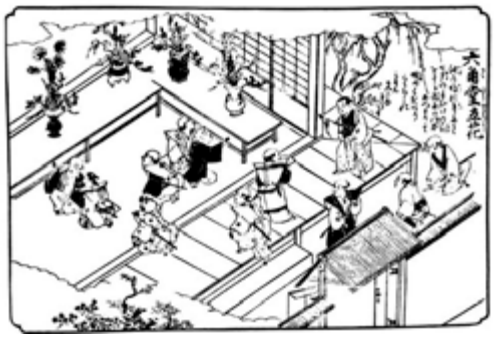
このようなたてばなを定着させたのは、将軍側近の同朋衆であったと考えられている。

同朋衆は将軍家の座敷を唐物の花瓶や書画、工芸品で飾る「座敷飾り」や諸芸能に従事した特別技能者たちをいう。

三代将軍足利義満の頃から花の御所や北山殿で、七夕法楽として仏教的行事の中で花を立てることが盛んに行われるようになり、同朋衆の立阿弥や能阿弥といった花の名手があらわれる。

また公家においても七夕法楽花会（花合）が行われ、山科家の雑掌である大沢久守、六角堂頂法寺の池坊専慶らが花会で花を立て、評判となる。

その後、一六世紀前半には、文阿弥（二世）が「文阿弥花伝書」を、池坊専応が「池坊専応口伝」という書を残し、たてばなの理論、様式の基礎を確立した。



「宝永花洛細見図」六角堂立花会
江戸時代前期頃の立花会の様子

さて、室町時代に立花の初期の姿である「たてばな」が武家や貴族の間で立てられていたのは間違いないだろう。七夕法楽花会（または花合）で飾られたたてばなはすぐには撤収されずに、近隣の人々も観賞することができたそうで、人々の関心もそこそこあったことが想像できる。

庶民の中でも富裕層の間では自分の家で座敷飾りを楽しむ者もあったのではないだろうか。花を立て、花瓶とともに観賞する立花の会も行われていたかもしれない。網本さんは次のように推測している。

虎明本には「此間は立花がはやって、各のまはり花をなさるるが」というセリフがある。茶道の七事式に花を客が順々に生ける「回り花」というのがあるが、七事式は一七〇〇年代半ばに定められたものなので、ここは七事式の回り花のことではないだろう。

狂言では連歌の会の出てくる曲が多いが、たとえば「千切木」でアドの「あたりの若い衆と寄り合うて、連歌の初心講を取り結んでござれば、すなわち頭に当たってござる」というセリフや、「連歌盗人」でシテが「初心講を結んで、近日連歌の当に当たっては御座れども、身上不如意に御座って、この当を勤めう手段が御座らぬ」というセリフからもわかるように、当時の連歌会では、頭を持ち回りで担当していたようである。これと同じく、虎明本の「まはり花」も、酒宴の準備をしたりする当番や会場の提供を持ち回りでやる花の会、というくらいの意味だったのではないだろうか。したがって、「真奪」で述べられている立花の会とは、各自の家を持ち回りの会場として、花を立て観賞する会であると推測しておきたい。引用おわり

現代では「いけばな展」が様々な会場で催されている。一度に多くの花をいけて、多くの人に見てもらうわけだが、あまり多くのいけばなが並ぶと、じっくりゆっくり味わってもらえているだろうかと思ったりもする。

室町時代のように、自分の足で花材を探してくる時代ではない。いい花屋さんにはいい花材が売られている。でもそこにやってくるまでには、自分の知らないところで、大変な手間と苦労がなされているわけで、そんな花材でいけた花なら、時間をかけて見てもらいたいし、その花を肴にわいわいと友と語るような場面もあったらいいなと思う。

浄瑠璃、能、狂言と、古の花文化を垣間見てきたが、現代においていけばなを文学で表現する人はないものだろうか。劇になるならどんな物語だろう。あなたにはどんな花のドラマがありますか？

除真（のきしん）の立花

仙溪

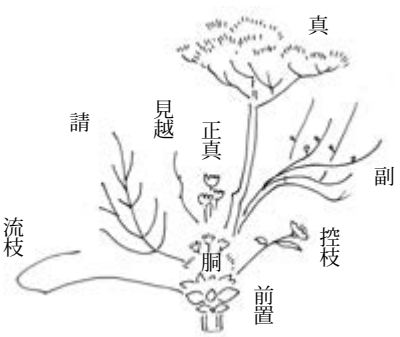
赤松と五葉松を真と請に使った立花。副、見越、流枝に朱木瓜、控枝と前置に椿二種、正真に白菊、胴には五葉松。あしらいに寒菊の開花をのぞかせた。

この花形は真が中程から斜めに出る「除真」で、こういうのを「行の花形」と呼ぶ。本勝手では真が左に出るので、右に出る場合は「逆勝手」ということになる。

「除真行の花形逆勝手」となる。

この立花は「富春軒初春の会」で立てたもので、蘇東坡の「赤壁の賦」という漢詩の屏風の前に飾った。屏風の幅にあわせて、流枝を長めにだしている。

花器は父が好んで使った森野泰明氏の陶花器「雲藍條文花器」。父の思い出がいっぱい詰まった大切な器だ。



直真（すぐしん）の立花

挿花　和田慶千
解説　仙溪

黒松の若木（若松）を真に。請に白梅、副に紅梅、見越に蝋梅（臘梅、蠟梅）。正真に黄菊、控枝に白玉椿、流枝に苔梅。胴に三光松、前置に赤松が使われている。あしらいに数椿。

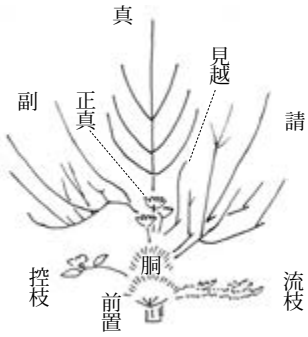
この花形は真が中心に真っ直ぐ立つ「直真」で、こういうのを「真の花形」と呼ぶ。副が左に出ているので本勝手である。

「直真真の花形本勝手」となる。

この立花は「冨春軒初春の会」で立てていただいたもので、今後も「初春の会」には立花研修会の先生に、お迎えの花として立てていただこうと思う。

花器は小川欣二氏の陶花器「追想花瓶」。先の立花研修発表会で岩田慶寿先生が使われていた。

若松を中心に、紅白の梅の対比が見せ場になっている。



水仙一色（いっしき）の立花

挿花　横田慶重
解説　仙溪

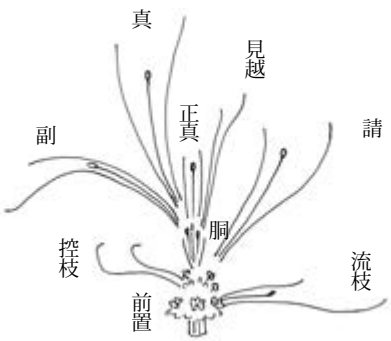
水仙だけで殆どの役枝をいれる立花を「水仙一色」と呼ぶ。

この花形は真が中程から斜めに出る「除真」で、「行の花形」と呼ぶ。真が左に出るので「本勝手」ということになる。

「水仙一色除真行の花形本勝手」となる。

この立花も「冨春軒初春の会」で立てていただいたもの。

花器は幾佐田（きさだ）昌宏氏の陶花器「紫紅彩花瓶」。赤色濃淡の小菊との映りがはんなりとしている。



桑原専慶流いけばなテキスト608号　2014年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五二五円　http://www.kuwaharasenkei.com

いけばなのドラマ　仙溪

8頁の最後にいけばなのドラマと書いて思い出したことがある。以前、金沢で若手華道家が企画したいけばなの祭典で、子供作文コンクールの授賞式を行った。作文のテーマは「花」で、たくさんの花にまつわる体験談が寄せられていた。入賞者の作文を読むと、そこには様々なドラマがあり、どれも花が大切な役割をもっていた。読むうちに涙がこみあげてくるものばかり。子供の感受性は大人達よりも繊細で豊かだ。花に対して新鮮な気持ちを忘れずにいたいと思う。

出会い花（5）　仙溪

クリスマスローズ　薮柑子（やぶこうじ）

小さな鉢植で売られている草花で、いつもとひと味違ったいけばなを、という狙いでいけてみた。

クリスマスローズは金鳳花（きんぽうげ）科・ヘレボルス属の多年草。多くは東ヨーロッパ、バルカン半島、トルコ、シリアに自生する。ある種がクリスマス頃に咲くのでこの名があるが、殆どは春に咲く。花に見えるのは萼なので、散らずに長く楽しめる。

薮柑子は薮柑子科・薮柑子属の常緑低木。東アジア一帯に分布する。万葉集では「山橘（やまたちばな）」の名で読まれている。

今回は湯呑に直立させてみた。こうするとクリスマスローズも姿をはっきり見せられる。湯呑みの作者は右が清水卯一（しみずういち）氏、左が清水保孝（やすたか）氏。お二人は親子でいらっしゃる。湯呑みの中心から立つようにしたので、水際が美しい。丸盆で一つに。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015年
2月号
No.620

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

蘊奥とは

仙溪

「蘊蓄を傾ける」という言い方がある。持っている知識や技能を精一杯発揮するという意味だが、「蘊」には、積む・蓄えるという意味がある。この蘊に奥をつけた「蘊奥」という言葉はご存知だろうか。「学問、技芸などの最も奥深いところ」を表す熟語だ。芸の蘊奥を極める、などというように使われる。「うんおう」又は「うんのう」と読む。

先月のテキストに、何でも長く続けると、見えなかったものが見えるようになる、というようなことを書いたが、花の奥義を極め、多くのお弟子さん達に慕われるようになられた大師範の先生方は、まさに様々なことを体得され、その一つ一つがご自身の内に積み重なって、素晴らしい知識や技能の蓄えをお持ちだ。

そんな大師範には、しかるべき役職にお就き頂いて、私が道に迷った時に教えを請いたいとの思いで、この度、家元になってはじめて、数名の先生方に「華老」位に就いていただくことにした。そしてその委嘱状に、「蘊奥」の発揮を願う一文がある。技術や知識はもちろんのこと、豊かなお人柄も見習わせていただきたい。

先日は岡山での総会・新年会で華老の授与式をさせていただいたが、それぞれの先生のお人柄を感じる、素敵なご挨拶をしていただき、胸が熱くなった。

華老の先生方（敬称略）

上野　淳泉（岡山）
竹中　慶敏（京都）
小野　静泉（岡山）
武田　慶園（徳島）
長谷川慶賀（大阪）

この度、次の先生方に、華老にご就任いただきました。

山本　竹泉（岡山）
竹内　慶陶（京都）
岩沢　雅芳（岡山）
横田　慶重（京都）
鈴木　秀映（岡山）
和田　慶千（大阪）
室山　粋声（岡山）
尾﨑　慶和（徳島）

今月号で紹介した「立華時勢粧」の中には、いけばなを習う心得について「事と理」があると書かれている。辞書を見ると「事」はものごとの事物・事象のこと、「理」はその背後にある真理と説明されている。まず、いけ方を身につけることに専念し、上手になったら「どんな花をいけるか」を考えよ、ということなのだと思う。

華老の先生方の花はいけ方はもちろん上手いうえに、皆さん独特の雰囲気がにじみ出ている。「事理不二の境に至りて花に自由を得べし」なのだ。父もまさに自由を得た花をいけていた。私もそこを目指したい。

牡丹と雪柳　　仙溪

「この深い紺色の器には、薄紅色が鮮やかな、この牡丹がいいと思うの。雪柳と二種でどうかな」と、副家元が花屋でそこまで決めてくれていた。今回は花器ありきで、合う花を考えるという決め方。私がいけることになった。

いけながらとても自然な組みあわせだと思った。雪柳を一方に集めて、牡丹をそっと挿しただけだが、静と動、軽重の対比を楽しみながらいけた。

花材　牡丹（牡丹科）
　　雪柳（薔薇科）
花器　線刻陶花瓶（竹内真三郎作）

水仙一色立花　　仙溪

先月のテキストに掲載した水仙一色立花は、直真立てと云って真が直立している。もし真が左に除くと除真立てとなるが、その場合の真の水仙は右の葉が左の葉よりも高くなる。よって直真立ての真の水仙も右を高くすべきなのに、逆に左を高くしてしまっていた。今後、皆さんが混乱しないように、絵に描いて訂正します。

水仙一色立花

直真立　真の花形
真、副、請、見越、正真、控枝、流枝、胴・・・水仙
前置・・・小菊

臘梅の立花

〈表紙の花〉　挿花　中道慶清

「冨春軒初春の会」で、もてなしの花として立てた三つの立花を解説する。

この真、請、見越の臘梅は一本の幹から出た分かれ枝をそのまま花形に取り込んである。立派な臘梅で、撓めると折れてしまう。本来の見越は請側の後ろに出るのだが、真側の後ろに出ていた枝を生かして残し、本来の見越の出口に松を覗かせている。臘梅が際立つように、他の役枝は軽くつくられている。

花材　臘梅（臘梅科）
　　松（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　椿（椿科）
　　枇杷（薔薇科）
花器　天女模様銅花瓶

老松の立花

〈2頁の花〉　仙溪

真と請の老松のバランスが見所。真の松は直真のように直立し、上の方で右に除いてから大きく左へ出た枝だったのをそのまま使った。自分としては直真として立てている。松の緑と木瓜の朱色は相性がいい。金明竹を見越の下にあしらうことで、新年を言祝ぐ気持を添えた。

花材　老松（松科）
　　木瓜（薔薇科）
　　枝垂柳（柳科）
　　金明竹（稲科）
　　菊（菊科）
　　椿（椿科）
　　銀芽柳（柳科）
　　枇杷（薔薇科）
花器　銅花瓶

雲龍梅の立花

〈3頁の花〉　挿花　阪本慶純

雲竜梅はとても香りがいい。玄関の間に松の立花、その右の間の床に臘梅、左の間の床に雲竜梅を飾ったが、それぞれに初春の香りを楽しんで頂けたと思う。床の大きさにあわせて、雲竜梅の立花は小さめに立ててある。「萬歳寿而康」の書の軸を掛けてその前に飾ったが、字を隠さず、よく調和していた。松の立花は金屏風の前、臘梅の立花は金地に波模様の舞扇の軸の横に飾った。

真が右に張っているので、流枝でバランスをとっている

花材　雲竜梅（薔薇科）
　　寿松（松科）
　　椿（椿科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　小菊（菊科）
花器　銅立花瓶

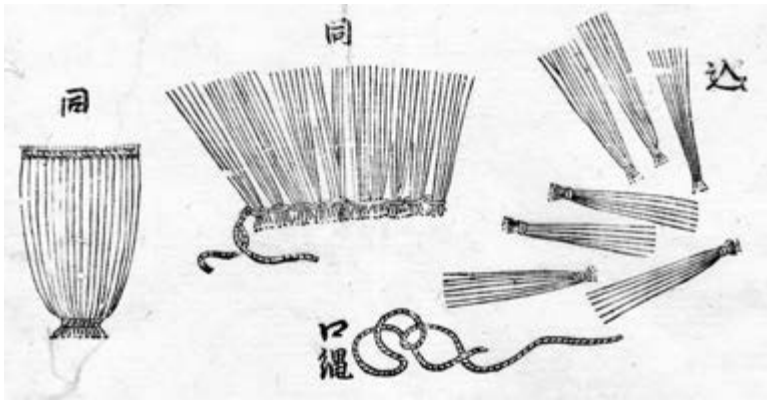
立華時勢粧を読む　⑨

立花秘傳抄　四

（前号の続き）

込の事

込の高さ、冬は瓶の口より二分ひくく切るべし。夏は三分、草花に水をよくあげんがためなり。



ふとき物さす時は、少しやわらかにしめ、ほそき物にはかたく結うべし。緩急の境、よくわきまうべし。

わらのはかまをとり、真中より二つに切り、切り口を上になし、結い目の上を、つよく打って、つよくしむべし。

床前の事

立花、初めての方へ立てに行く時は、床見申度よし、兼ねていいつかわし、方丈書院、仏前、床の高さ広さ、奥行き左明かり、右あかりを、よく見立て、懸けものかけさせ、いかなる祝儀、又は客の名字をも尋ねて、万指し合いなき様に指すべきなり。

床ぶち高くは、花台ひくく。おとしかけより、心はひくく。前置、流枝、床ぶちより、前へ出すべからず。後ろへ枝葉さわらず。横は張付へかまわず。床ふかくは、花形まろく、床浅くは、花形ひらめに指すべきなり。

掛字、懸絵、よく見ゆる様に、花形取り組むべし。名印の所かくす事大きに嫌う。又懸物あしらいがたき時は、砂の物を用うべし。

床の張付、人形生類のたぐいならば、同心得有るべし。

掛絵、草木にて風をもちたる気色あらば、立花にも、その風を請けてもたすべしと云えり。

いまだ懸物見ざる方へ行くならば、心を二本こしらえて行くべし。又柳梅もどきなどの、葉のなき物を用意すべし。

大床に、三瓶立てる時は、中は当季の花を、心に用うべし。

掛物、三幅対、四幅対の時、二瓶又三瓶のおきよう有り。

絵を請けて指す花、天神に梅、観音に柳、達磨に芦、龍に松、虎に竹、獅子に牡丹、ほかこれになぞらえて、作意有るべし。

上座の方へ、流枝を出し、請に珍花を指す。古来の法なり。然れども上は心より、下は水ぎわに至るまで、客賞翫と、意得て指す時は、花形風流に、作意多く、あらたなるを、珍花というべし。

6

下指の事

客花ならば、下指よくいたすべし。昼の客ならば、朝に行き、朝の客ならば、夕より指すべし。花おそく、客来るを待つ時節には、亭主気遣うものなり。

下指は、十の内七八分ほどして、根じめあしらいなんどを、残すべし。亭主方、見物ある時、あまり無造作なるも興なきものなり。

客花には、草花に限らず、充分に盛りなるを用いるべからず。前かたより、中びらきを立て置き、客来の時分、よくひらくように心得べし。

立花見様の事

花を見るに、礼儀を以てし、さて床前五尺ばかりに寄せ居て、先ず心、正心、副、請、見越、流枝等の、大枝の取り組みを、能く見て、又左右へ礼儀をのべ、その後床前へ近くより、胴、前置、水ぎわの、こまやかなる所を見るべし、かならず、水ぎわ、又はうしろをのぞき見るべからず。

初心の花なりとも、かるがるしく見て立つべからず。指し合い法度有るとも、不審打つべからず。亭主所望するとも、率爾に、直すべからず。上手の花なりといえど、悪しき所なきにあらず。初心の花なれども、又よき所あらずという事なし。そのよき所を見覚え、悪しき所を見過ごすべし。世人花を見て、あしき所をかたれども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり。

立花習いようの事

花を習うに、先ず直心立をよく指し覚え、又除心、行草九品の花形、次第に修練すべし。凡そ事理の二つ有り。初学の時は、事を先にして理を後にすべし、瓶数重ねれば、おのずから、指し合い法度を除くべし。中此に至りては、事理両輪のごとくすべし。上手になりては、事を捨て、理を工夫すべし。然る時は、事理不二の境に至りて、花に自由を得べし。

師に花の直しを請ける時は、瓶の水七八分に入れ置き、下草を用意して相待つ時、師来たりて、褒美する事有れども直しを乞うべし。一手なおる時、今一手としいて乞うべし。師の法にて、二手よりはなおさず。尋ねる事あらば、人なき所にて問うべし。又は師家にあゆみをはこびて、その執心をあらわさざれば、師おしえざる物なり。

伝授と云うは、道の尊敬、芸の奥義なり。かるがるしく、人に語る事をなさず。金も用いざれば、瓦石に同じ。たとえば伝授したりとも、修行未熟ならば、何の益かあらん。師印可すというは、事理相応の時節を待って、これをゆるす。

初学の時は、下草多く、花形あつく、出物ゆるやかに指すべし。巧者になるほど、花きれいに、小体になるものなり。世人ここに止まりて、よしとおもう。これいまだ上手の位にあらず。必ずきれいになづむべからず。

一瓶の床花は、花形やさしく、手つま細やかに、見所おおきをよしとす。会の花は、花形風流に、目に立つように指すべきなり。上手の花は、下草多からずして景多し。これを薄うて厚しという。下手の花は、下草多く見所なきを、あつうてうすしと名づく。

立花秘傳抄の四　終

7

春の声

＜9頁の花＞　仙溪

枯葉の間から春の花たちが顔を出しはじめる。頭上の木々に葉が茂るまでに、葉を伸ばし花を咲かせる。温もりはそこまで来ている。春の声に耳を澄ませよう。

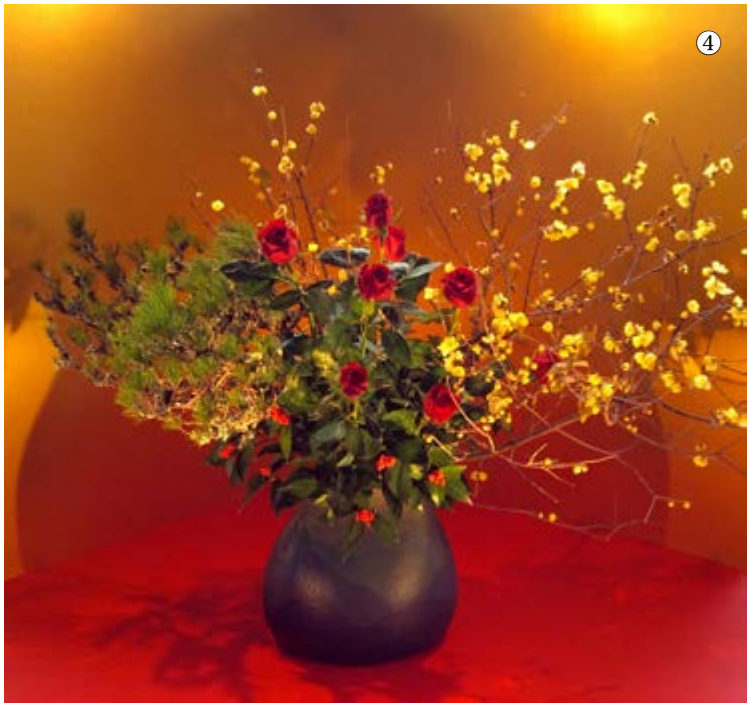
花材　鶯神楽（忍冬科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
　　スイートピー（豆科）
花器　金彩舟形陶花器

京都駅新春のいけばな

写真④　仙溪

駅前広場に年末から7日間飾ったいけばな。赤い薔薇はサムライという品種の特級品で、和歌山の生産者のもの。作り手の愛がつまっている。

花材　臘梅（臘梅科）
　　老松（松科）
　　薔薇（薔薇科）
　　千両（千両科）
花器　彩泥陶花器（宮下善爾作）



花の見方

仙溪

「立華時勢粧」には「立花見様の事」として、人が立てた立花を拝見するときの心得について書かれている。

例えば招かれた家の床の間に立花が立てられてあるとして、どのように拝見すればよいかが詳しく書かれている。現代ではそのような機会は希になったが、心得として覚えておこう。立花は手間をかけて立てるのだから、拝見にも礼儀をつくしたい。

また「世人花を見て、あしき所を語れども、よき所を語らず。その心花にあらざるがゆえなり」とも書かれている。初心者の花でも何かいい所を探すようにしなさい、見つけたいい所を覚えておきなさいと教えている。

花の道を極め、花から何かを得ようとするならば、他人の花の批判ばかりしているようではだめですよ、ということだ。たとえお弟子さんがいけた花であっても、そこに新たな発見ができるような、大きな器を持ちましょう。

黄色に紫をそえる

＜10頁の花＞　櫻子

黄色と紫色は反対色で、黄色は若々しい明るさ、紫色は大人びた高貴なイメージがある。作例では緑色と黄色の構成に、鮮やかな紫色をポイントで加えて色彩をひきしめてい

る。

リューココリネ（レウココリネ）は南米チリのアンデス地方に分布する百合科・リューココリネ属の多年草。切り花でもいくつかの花色があるが、紫の花色が多い。ほのかに良い香りがある。

花材　ミモザ（豆科）
　　チューリップ（百合科）
　　リューココリネ（百合科）
花器　結晶釉水盤（前田保則作）

器から花を選ぶ

＜11頁の花＞　仙溪

この花も、4ページの花も、自宅での新年会で部屋の設えとしていた花で、どちらもはじめに花器が決まっていて、花器に合う花を考えていけている。いつも「テキスト」の花は、花をはじめに選んでから花器を考えることが多いのだが、花器が決まっているというのも花選びの勉強になると思う。

緑として使ったブプレウルムは、和名をツキヌキサイコ（突抜紫胡）という。芹科・三島紫胡（みしまさいこ）属（ブプレウルム属）の一年草で、ヨーロッパ原産。優しい緑色と、ユニークな姿が初春の清々しさを感じさせてくれた。

花材　カトレア（蘭科）
　　シンピジウム（蘭科）
　　ブプレウルム（芹科）
花器　耳付陶花瓶（竹内真三郎作）

桑原専慶流いけばなテキスト620号　2015年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

楽しくなる器

櫻子

器を買いに街に出ましょう。

私が器を探すとき、何のために花をいけるかによって、見方を変えている。花展用なのか、テキスト撮りのためか、料理教室のテーブル飾りか。飾る場所をイメージして、その場の雰囲気に似合う器を探す。

春らしいラナンキュラスと菜の花をいけた器は、私のイタリアン・レッドのキッチンでよく使っている。どんな色の花でもモダンに飾ることができるのと、摩天楼のような形が楽しい。

花材　ラナンキュラス（金鳳花科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶花瓶（伯耆葉子作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016年
2月号
No.632

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

「新たな気づき」

花道において、大師範の先生方がいける花には、なんともいえない雰囲気があるもので、それは、その人それぞれにご自身の経験から得てこられた、その人ならではの「気づき」の積み重ねが自然に出てくるのだと思う。

それに倣って一つでも多くの、素敵な「気づき」を得られますように、というのを、この一年のテーマとしたい。

黒芽柳とアマリリス

＜2頁の花＞　仙溪

花材　黒芽柳（柳科）
　　アマリリス（彼岸花科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花型　盛花
花器　陶花器

黒芽柳は猫柳の突然変異で生まれたと考えられている。

明るい洋花との相性がいい。

横から見た奥行き

クロコダイルファーン

＜3頁の花＞　櫻子

花材　クロコダイルファーン
　　（裏星科）
　　カザリシダ（裏星科）
　　ガーベラ（菊科）
花型　盛花
花器　陶コンポート

羊歯の仲間を2種類一緒にいけてみた。後ろに2枚左右に立てたのがクロコダイルファーンで、まさに鰐皮のような凹凸がある。手前2枚と後方に入れたのがカザリシダの一種で、尖った葉の付き方が左右交互にギザギザに付いていて格好いい。クロコダイルファーンだけだと夏向きのいけばなだが、濃い緑色のシャープな形のカザリシダを加えることで、冬の部屋にもしっくりと馴染む。

観葉植物の葉を2種組み合わせることで、表現できる雰囲気というものもあることに気付いた。今後もいろいろ試してみたい。

横から見た奥行き

木蓮（もくれん）

仙溪

花材　木蓮（木蓮科）
花型　生花　草型　副流し
花器　銅砂鉢

昨年3月の京都東山花灯路いけばなプロムナードにいけた木蓮の生花。

いけた時は蕾の先に紫の花色が見え始めた頃で、暖かそうな産毛の生えた芽鱗をいくつか剥がして見せていたが、会期を終えて自宅に飾ってから数日後にはほとんどの花が産毛を脱いで春爛漫となってくれた。

早春の白木蓮は高木になるが、少し遅れて咲く木蓮（紫木蓮）は低木。どちらも中国原産の花木で、単にモクレンと呼ぶのは紫木蓮とも呼ばれる紫色の方だ。

モクレン属の祖先は約1億年前に誕生したことが化石から分かっている。地球上で最古の花木と考えられ、花木類の祖先にあたるそうだ。人類誕生以前から咲き続けている花。木蓮の開花は、地球の春の産声なのかもしれない。

山茱萸（さんしゅゆ）

＜表紙の花＞　仙溪

花材　山茱萸（水木科）
花型　生花　草型　留流し
花器　煤竹竹筒

山茱萸は中国、朝鮮半島原産の落葉小高木。早春、枝の先に小さな黄色の小花が集まって咲き、秋にはやや細長い赤い実が枝にぶらさがる。

山茱萸の稽古をすると、「庭のサンシュの木、鳴る鈴かけて～」と歌われる民謡、稗搗節（ひえつきぶし）を懐かしく思い出される方がときどきおられる。今はインターネットで簡単に視聴することができるので探してみると、この歌のサンシュの木は山茱萸ではなくて山椒の木だった。

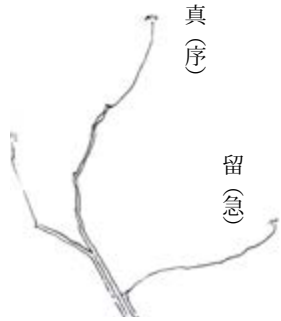
山椒の木に鈴をかけ、その鈴が鳴ったら家から出ておいで、と歌う。日向地方の方言では山椒のことをサンシュと呼ぶのだ。

九州宮崎県椎葉村には、その昔、源平の合戦で敗れた平家（へいけ）の落人（おちうど）が住みついた。それを知った頼朝の命を受けて、落人討伐のためにやって来た那須大八郎は、平家の鶴富姫と恋に落ちる。姫の屋敷の山椒の木にかけた鈴が、二人の密会の合図になった。そんな恋話の歌を歌いながら、稗（ひえ）を搗（つ）いた。まさに、その土地の歴史と文化を感じる生活のひとこまだ。

さて、山茱萸（さんしゅゆ）。日本に来たのは江戸時代中期に薬用として種子が持ち込まれた。実が茱萸（ぐみ）（茱萸科（ぐみ））に似るのでこの名がある。山茱萸の実は食べられる。強壮薬として煎じて飲んだり、果実酒にしたり。熟した実を熱湯につけ、種子を取り除いて日干しにしたものが生薬となる。

いけばなでは春の花材として重用される山茱萸だが、木に粘りがあるので少々きつく撓（た）めても折れてしまわない。節を避けて、太い幹は切り撓め、細い枝は捻（ねじ）り撓めで形をつける。

蕾でいけたあと、部屋で花が咲いてゆくのはいいものだ。花の色が春を感じさせてくれる。



陰陽五行

陰の気、陽の気と云うが、そもそも「気」とはなんだろう。「生命・意識・心などの状態や働き」「天地に生じる自然現象」「あたりに漂う雰囲気」などと説明されるが、要するに様々な「状態」「働き」を「気」ととらえることができる。

ものの状態や働きはその性質が強いときもあれば、弱い時もある。さらに極まって逆の状態や働きに転じたりもする。単純にこれは陰、これは陽というふうにすべてを二つに分けておしまいではなくて、陰的なものの作用と、陽的なものの作用を知って、それらの調和と、その間にどんな流れが生じるのか、それらが交わって何が生まれるのか、という事象の理解が重要となる。

陰と陽、この二気の働きによって万物の事象を理解するのが陰陽思想なのだ。森羅万象（しんらばんしょう）、宇宙のありとあらゆる物は、相反する陰と陽の二気によって消長盛衰（しょうちょうせいすい）し、陰と陽の二気が調和して初めて自然の秩序が保たれると考える。

陰と陽のそれぞれの性質を表にしてみよう。

陰	陽
遠心力	求心力
膨張、拡散	収縮、融合
上昇	下降
軽い	重い
暗い	明るい
湿潤	乾燥
柔らかい	硬い
冷たい	熱い
穏やか	活発
地	天
月	太陽
冬	夏
夜	昼
女性	男性
偶数	奇数

立華時勢粧（りつかいまようすがた）を読む ⑳

立花秘傳抄　五

立花名目　並びに　訓解（つづき）

貫枝（ぬきえ）の事

高木高草は左右へぬくべし。小木小草は水ぎわたりといえども、後ろよりぬくべからず。また高木たりといえど、副、請と両方に遣う時はその中につたいの枝を指してよし。

心の後ろより幾色もぬく時は、もぢれ枝とて縁のきれる事あり。古人云う、重山重山とぬくべしと云えり。たとえば扇をひろげて重ねたるがごとく、一とおり一とおりもぢれざるように立つべきなり。

除真の時は後ろより草をぬくもあり。又ぬかざる流もあり。草の心の時はぬくべき事勿論なり。木の心にもぬきて苦しからず、立て様あるべし。されば山峡に池あるあり、林辺に野を見るあり、その体数多くあり。

語りて曰く、

「雖為沢辺千丈松　不似嶺頭一寸草」

古歌

夏山の　草葉のたけそ　しられけり
去年見し小松　ひとしなければ

立花秘傳抄の五　終

【テキスト６１２号　内容の訂正】
真行草の図（の５行目）
・・・古人松を切り花を折って・・・

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）

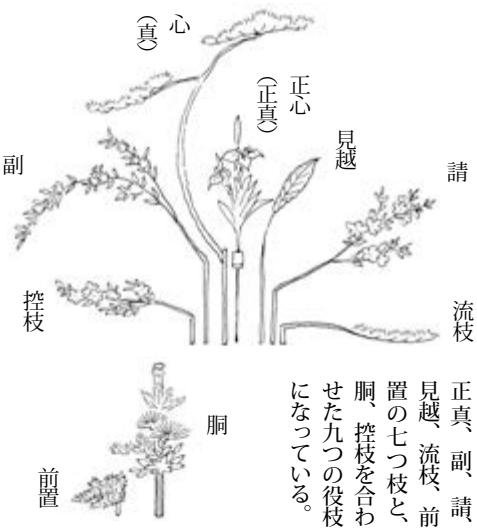
「立花秘傳抄五」の後半には「立花名目、並びに訓解」という、立花を実際に立てる上での役枝の考え方が書かれている。すでに掲載した立花図の一つで、骨格となる役枝がどのようになっているのか図解してみる。

立花の名目（めいもく）（役所（やくどころ）の呼び名）

第八十二図　除真立の内真の花形　高橋吉兵衛

松　山吹　躑躅　杜若　柘植　熊笹　小菊
要　柏　檜扇

役枝の分解図（器の口から上）



現在では、真、正真、副、請、見越、流枝、前置の七つ枝と、胴、控枝を合わせた九つの役枝になっている。

橐駝（たくだ）について

前号「立花色の事」にある「橐駝」について書かれた中国古書「種樹郭橐駝傳」は誠に興味深い内容なのでここに紹介します。

小林益夫氏の「風幡亭雑記帳」より転載。原文は「新釈漢文大系71　唐宋八大家文読本（二）　星川清孝著　明治書院」

「種樹郭橐駝傳（しゅじゅかくたくだでん）」

柳宗元（773～819）

通釈

郭橐駝（かくたくだ）は、そのはじめは何という名であったか分からない。背の曲がる病気で、背がもり上がってうつぶしになって歩くのが、駱駝（らくだ）に似ているところがあるので、それゆえ郷の人は駝（だ）と呼んだのである。駝はこれを聞いていった、甚だ（はなは）善い。私を名づけてまことに当たっている、と。それによって彼は自分の名を捨てて、彼もまた自分で橐駝（たくだ）といったということである。その郷を豊楽郷という。長安の西にある。駝は樹を植えることを仕事としていた。およそ長安の豪族や金持ちで物見遊山の庭を作る者や、果実を売る者などは、皆争って駝を迎えて彼の培養と視察とを請うのであった。駝が植えた所の樹は、遷（うつ）し易（か）えることがあってもよく根がつき活きて、大きくなり茂って、早く実がなり殖（ふ）えないものはなかった。ほかの植木をする者が、うかがい見て見習い慕っても、それに及ぶことのできるものがなかった。これを尋ねるものがあると、彼は答えていう、橐駝は木を生命長く、その上茂らせることができるのではない。木の天然自然に従って、その生まれもった生きる働きを導くことができるだけである。およそ樹木の性は、その根本はまっすぐに伸びるようにと欲し、その土をかけ養うことは平均していることを欲し、その土壌はもと植えてあったものであることを欲し、その根本の土を固めるには密ですき間のないことを欲するのである。すでにそうしてしまうと、あとは動かしてはならない。心配もしてはならない。そこから立ち去ってあとは二度と振り返り見ないがよい。その植える時は子を育てるときのように大事にし、植えて手放すときは棄てるようにすれば、その木の天性はそこなわれず完全で、その生きる働きが、適切に行われるのである。それゆえに私はその成長を害しないだけであって、それを大きくし茂らせふやすことができる力があるのではない。そのなる実を抑えへらすことをしないだけであって、それを早く実らせ多く殖やすことができる力があるのではないのである。

ほかの樹を植える人はそうではない。根は拳のようにかがまって土は前と変わり、その土を寄せ養分をやるのに、もし度を過ぎるのでなければ足りない。かりそめにも是に反して良くやっていても、また木を可愛がっていつくしみが過ぎ、心配して熱心が過ぎて、朝に良く見ては暮れに撫で、もはや立ち去ってからまた振り返り見る。甚だしいのはその木肌に爪を立てて生きているか枯れたかを験（ため）してみ、その根元をゆり動かして土にすきがあるか密につまっているかを調べてみる。そうして木の生きる働きは毎日離れて行ってしまう。これを愛しているというけれども、その実はこれを害している。これを心配するというけれども、その実はこれをいじめているのである。それゆえに私には及ばないのである。私はその上何ができようか。何もできないのである、と。

問うものはいった、お前のやり方を、役所の政治に移して行うことができるだろうか、と。駝はいった、私は植木のことを知っているだけである。政治は私の仕事ではない。しかし私は村里に住んで人の長であるものを見ると、好んでその法令を面倒にして、大変人民を憐（あわ）れんでいるようでありながら、結局人民に禍（わざわい）をしている。朝に晩に役人が来てさけんでいう、役所の命令で、お前たちの耕すことをうながし、お前たちの作物を植えることをはげまし、お前たちの収穫を監督する。早くお前たちの糸を繰れ、早くお前たちの糸を織れ、お前たちの幼児を育て、お前たちの鶏や豚を十分に成長させよ、と。鼓を鳴らして人民を聚（あつ）め、拍子木を撃って呼びつけるのである。私たち農民は食事をやめて、それで以って役人をねぎらいもてなすのですらも、また暇がないのである。その上どうして自分たちの生活を繁昌させて、自分たちの生きるための心の働きを安全に保とうか。とてもできるものではない。それゆえ、病んでその上仕事を怠ってしまう。このようであれば、政治も私の仕事と、それこそ似ているところがあるのであろうか、と。問うものは喜んでいった、それも善いではないか。私は樹を養うことを尋ねて、人を養う術がわかった、と。このことを書き伝えて、それを役人のいましめとするのである。

（橐＝袋のこと。橐駝（たくだ）＝ラクダの正名。）

7

臘梅の立花　「冨春軒初春の会」　仙溪

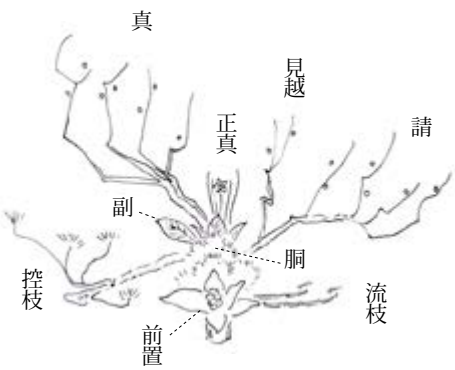
花型　除真立　行の花形
花材　臘梅（臘梅科）
　　松・五葉松（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　万年青「残雪」（百合科）
　　椿（椿科）
　　枇杷（薔薇科）
花器　銅立花瓶

立派な臘梅だった。真に2本、請に1本。元の姿のまま花器に立ててこの姿になった。蠟梅とも書くが、私は臘月（十二月）の臘を使っている。

「残雪」という斑入りの万年青で前置をつくった。「万年青の前置」は立華時勢粧にも出てくるが、いつか納得のいくいけ方ができるようにしたい。

大きな枇杷の葉を副にしたが、図で控枝と書いた松を副と見なしてもいい。

ロームシアター、冨春軒初春の会、イケバナインターナショナル・デモンストレーションと、3カ所でご覧頂けたことに感謝している。



古書に習う

7頁で紹介した「種樹郭橐駝傳」は、流祖が書き記してくれたことを辿って知ることが出来たわけだが、誠に含蓄のあることが書かれている。三二八年前の流祖のメッセージを受け取ったみたいな、不思議な思いがしている。さらに、たまたま新潟の庭師さんがこの古書の紹介をされていたお蔭もある。世の中には知らないことがなんと多いことか。でも、求めていれば、きっと新たな出逢いや気づきが得られるのだ。

白梅の立花

「冨春軒初春の会」

挿花　川瀬慶裕

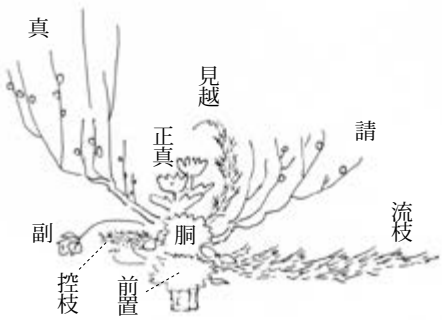
花型　除真行の花形

花材　白梅（薔薇科）
　　這柏槙（檜科）
　　菊（菊科）
　　白玉椿（椿科）
　　小菊（菊科）

花器　陶コンポート
　　（宇野仁松作）

白梅と這柏槙で調子を整えた、横張の立花である。

花器に色があるので、敢えて色数を抑え、白梅の品格を引き出した。



松と山茱萸（さんしゅゆ）の立花

「冒春軒初春の会」

挿花　米山慶嘉

花型　除真立　行の花形

花材　松（松科）

山茱萸（水木科）

椿（椿科）

菊（菊科）

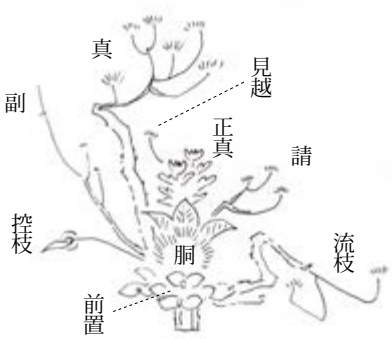
小菊（菊科）

枇杷（薔薇科）

花器　陶花瓶

真（しん）の松の出口を低くして、請（うけ）の山茱萸の出口を高くした。真の梢が中心より右へ出る時は、左流枝といって流枝を左に出すこともあるが、真の松の幹が太いので、流枝は右へ出してバランスをとっている。

流枝の屈曲した枝と副の伸びやかな枝の対比が見所になっている。



桑原専慶流いけばなテキスト632号　2016年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

バンダとカーネーション

櫻子

先日雪柳とバンダをいける機会があった。枝の姿が自由に広がる真っ白な雪柳と濃いピンク色のバンダを取り合わせると、今年の満開の桜を思わせるように華やかに。

バンダは、東南アジアやオーストラリアで育つ蘭で、樹木や岩肌に根を張り付けさせて伸びていく着生植物である。上へ上へと伸びて大きな姿になる。野生の原種を原産地で見てみたいと思うような花だ。

長く伸びた気根から空気中の水分を吸ってくれるので、花器に収めずにそのままの姿を飾ることもでき、時折霧吹きで水をかけてやると立派な姿で美しく花を咲かせた。

花会が終わった後も家に持ち帰り、飾っているが、途中で花茎から折れてしまった花を食卓に。小さな姿になっても、花器の水が新鮮で澄んでいれば生き生きしてくれている。

元気のないときに、この花を見ると気持ちが晴れやかになるのは、きっとこの花が美しい鳥が飛び交う樹林の緑と強烈な太陽の輝きを想像させるからだと思う。

花材　バンダ2種（蘭科）
　　カーネーション（撫子科）
　　手毬草（てまりそう）（撫子科）
花器　アンティーク・ガラス花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017年
2月号
No.644

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

白梅の立花
南天の胴

＜表紙の花＞

「冨春軒初春の会」
挿花　朝倉慶佐
花型　除真（行の花形）
花材　白梅（薔薇科）
南天（目木科）
水仙（彼岸花科）
椿2種（椿科）
松（松科）
花器　天女模様銅器

南天の姿がうまく生かされている。とり合わせもいい。

蛇の目松の直真立花

＜2頁の花＞

「冨春軒初春の会」
挿花　二井慶博
花型　直真（真の花形）
花材　蛇の目松（松科）
松（松科）
木瓜（薔薇科）
菊（菊科）
小菊（菊科）
枇杷（薔薇科）
花器　銅立花瓶

葉に斑が入る珍しい蛇の目松が際立つように、色数をおさえてある。静かな優しさが感じられる。

アララギの立花
万年青の前置

＜3頁の花＞

「冨春軒初春の会」
挿花　桑原仙溪
花型　除真（行の花形）
花材　アララギ（一位科）
　　臘梅（臘梅科）
　　縞万年青（百合科）
　　菊（菊科）
　　椿（椿科）
花器　銅立花瓶

立花時勢粧の立花図には万年青が3図に描かれているが、すべて前置に使われている。立花秘傳抄には「藜蘆」「老母草」の字が使われ「花道第一の秘伝の物」「師範なくては立つべからず」と書かれている。

万年青は山の奥にひっそりと自生している。野生の万年青を採集していけていいのは最小限の枚数を切ってもいけることができる、確かな目と腕を持った師範のみ、と流祖の時代も大切にされていたのではないだろうか。栽培品種であっても、万年青は別格の扱いをすべきなのだ。

以前、流派の長老がいけた万年青の生花を見たとき、その神秘的な美しさに圧倒された。万年青は葉の一枚一枚に微妙な捻れや反りがあり、それをどう生かすかは経験がものをいう。いつの日か「出生玄妙」な姿を手に入れたい。

山茱萸（さんしゅゆ）の立花

仙溪

花型　除真（行の花形）
花材　山茱萸（水木科）
　　小手毬（こでまり）（薔薇科）
　　桃（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　松（松科）
　　椿（椿科）
　　猫柳（柳科）
　　小菊（菊科）
花器　広口陶花瓶

以前、2月末頃に稽古で立てた立花で、それぞれが開花した頃に撮影したのでとても色鮮やかだ。和花にこだわるなら正真には杜若というところだが、同じ菖蒲（あやめ）科のアイリス（ダッチアイリス）なら同じ温帯育ちで姿も清楚なのでよく似合う。

アイリスは開花すると結構な大きさになるため、真をしっかり除（の）かせて正真の空間を大きくつくっておくようにする。アイリスの青紫色が山茱萸の黄色を際立たせている。

立花を飾る

冨春軒初春の会には3瓶の立花を飾った。私は金屏風の前に。朝倉先生は富士の軸、晩白柚と。二井先生は金の扇の軸と。それぞれの写真では花の奥行きがわかる。

立華時勢粧を読む　㉛

立花秘傳抄　一

常磐木之部（つづき）

柳

祝言。上中。晒木用い、苔用いず。

本草に時珍曰く、柳枝弱らかにして垂流す、故にこれを柳と謂う。

崔豹が古今註に曰く、微風なれども大に揺らつく、故に独揺と謂う。

説文、青柳、垂糸柳、人柳。

漢の武帝苑中に柳あり、一月に二度臥して帝を拝む、非情心あり、よって人柳と名付く。

和名　糸柳、八千代草、河高草、風無草。

古歌

あづさ弓春の柳に風見草のどけき色に打なびくらん

ふる雨の露に乱るる春薄梢に秋のかぜを見るかな

柳の心、初冬朔日より用うべし。初秋に葉落ちて初冬に芽ぐむものなり。名付けて芽張柳と云う。

柳の心立てる時は正心に葉あるものを用うべし。古来かぶろ松用いるは柳に葉のなきゆえなり。請、副の心得同前なり。

柳は心に立てるに一本立てでもくるしからざることは、しだれ左右へ長く前後へなびきたる物なれば、数枝の景気移る故なり。然れども祝言の花などには河柳一本下へあしらうべし。又請副には片なびきに遣い来るといえども、法度にあたらざる時は、もろなびきにても苦しからず。

柳はしだれ物なる故に、草木のしだれたる物さし合いなり。南天、冬薄、紫げんじ、つる水木、黄梅、連翹、竹。

柳の心ためようは、鋸にて七分きり、三分きりのこし、炭火にてよくあたためて、せんをかいてよし。細き柳はそのままあぶりて花巾をまきてねじためにして立てるなり。

河楊

祝言。水際より指し上て中上までに用いる。

本草曰く、楊枝硬くして揚げ起す、故にこれを楊と謂う。

俗にエノコヤナギと云う。白き狗子に似たるゆえか。

柳花杜詩に、顛狂柳絮風に随がって舞う。

藻塩云う白楊樹。

心、請、副に立てる時は、かならず水際まで下げるなり。水辺出生の物なれば上にばかりは景気うつりがたし。

白梅と立てまじえる事を嫌う。同色をにくむ心なり。

川柳九月ころは葉の下に白くめぐみてある

を、上の皮を一重むけば、白き花出るなり。こぶ柳またおなじ。

河柳しだれ物にあらず。心に立てる時は葉ある物たかくあしらうべし。南天などよく取り合う物なり。

立花時勢粧の118ある立花図のうち、柳（枝垂柳）は12図、河楊は2図に見られる。

真に枝垂柳を使った立花は3図で、3図とも梅があり、草花のとり合わせでは水仙が2図、万年青が1図。描かれた柳はどんな枝だったか、立体を想像するのも楽しい。

一方、河楊（かわやなぎ）はおもに「つや」として加えられている。白い花穂の柔らかな優しい枝が添うと、親しみが増すように思う。第72図では流枝にも使われて、軽やかな枝の流れが花型に動きを与えている。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第五十二図
立花　柳除真
西川和泉
柳　梅　松　水仙　柘植　千両
ひさかき　枇杷　嫩

第七十二図
立花　松除真
寺田八郎兵衛
松　菊　小菊　狗子柳　椿　柘植
熊笹　小羊歯　柏

立華時勢粧の時代

今月号の「立華時勢粧を詠む」の中で「本草に時珍曰く」とか「藻塩云う」などとあるのは、参考にした書物の名前やそれを書いた人の名前なので、紹介しておく。

李時珍（りじちん）

（1518年（正徳13年）～1593年（万暦21年））

字を東璧、号を「瀕湖仙人」といい、中国・明の医師で本草学者。中国本草学の集大成とも呼ぶべき『本草綱目』や、奇経や脉診の解説書である『瀕湖脉学』、『奇経八脉考』を著した。

現在の湖北省で、代々医師を務める家に生まれた李時珍は、幼い頃から、父の助手をしながら育った。子供の頃から病弱だった時珍は、医学への思いが強く、才能はたちまちに開花して、名医として名を知られ、明の皇族である楚王までが彼を頼るようになった。そして、時珍34歳の時に、明朝における医学の最高機関であった「太医院」に推薦を受けて、北京に赴く。だが、彼には中央の役人は性に合っていなかったらしく、1年後には帰郷をして、再び地元で医業を始める事となった。

中国の本草学は、神農が全ての薬草、毒草を食べて作ったとされる『神農本草経』を原典として、多くの増補が繰り返されてきた。だが、時代が下るにつれて、名称や薬効についての誤りや、重複、遺漏が多数含まれるようになっていった。李時珍はこれを憂慮して、新しい本草学書の編纂を志す。参考にした書物は800種、彼自身も多数の薬物の実物を収集して研究を重ね、26年の歳月を費やし、61歳の時に、『本草綱目』全52巻190万余字をもって完成させた。

最初その出版は神農を軽視するものとして事実上閉ざされる事となったが、李時珍に理解を示す人たちの奔走で、1593年に南京で出版、時の皇帝万暦帝への献上の機会を得、万暦帝から賞賛されて、出版に便宜が図られる事になった。

この本は日本などの周辺諸国のみならず、ラテン語などのヨーロッパ語にも訳され、世界の博物学・本草学に大きな影響を与えた。

藻塩草（もしおぐさ）

月村斎宗碩（そうせき）編　10冊　。1669年（寛文9年）刊。

連歌を詠むために用いるもので、古典等から語句を集め、注解を加えた書。20部門に分類されている。藻塩草は藻塩をとるために使うが、その際掻き集めて潮水を注ぐことから「書き集める」のかけ言葉になった。本書の題は「書き集めたもの」の意。

満作

仙溪

花材　満作（満作科）
花型　生花　草型　副流し
花器　広口陶花瓶

山では満作の花が咲いて黄金色に眩しく輝いているだろうか。そんなことを想像しながら、花が大きくて、太く立派な枝を一本買ってきて生花にいけた。満作の細枝はジグザグに曲がっているので、太めの幹の後ろに添わせるようにするといい。枝数は少ないけれど、花が大きいのでこのくらいでも見応えがある。

1月15日朝。雪に驚くレモンちゃん。

雪柳

櫻子

花材　雪柳（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　スイートピー（豆科）
花器　波文陶花瓶（竹内眞三郎作）

3月になると京都御苑の雪柳が満開になる。小さい梅のような花がこんもりと枝先まで咲いて雪が積もったようになるほど力強い。鴨川の土手の雪柳も鮮黄色の連翹と咲き競いあって、それに急かされるように桜の蕾が膨らんでいくような気がする。

雪柳の香りや景色を思い浮かべながら、アイリス、スイートピーを取り合わせた。

3月、京都御苑にて。

蘭２種と菜種

櫻子

花材　パフィオペディルム２種（蘭科）
　　カトレア（蘭科）
　　菜種（油菜科）
花器　乾山写手付鉢

パフィオペディルムという名前はギリシャ語のパフィア（ヴィーナス）とペディロン（サンダル、上靴）の二語からなり「ヴィーナスのスリッパ」という意味だそうだ。不思議な姿をしているので、よく食虫植物に間違われるが、花弁の一部（リップと言う）が袋状になっている。これは手前にいけたカトレアも同じで、この袋の中に虫が入ると花粉が付着して虫を介して受粉する仕組みになっている。

世界４大洋ランのパフィオとカトレアを一緒にいけるなんてとても贅沢な花だが、どちらも短くて悩んだ末、乾山写しの手付き鉢に盛り込んだ。

珍しいかたちを上から眺められるように。

桑原専慶流いけばなテキスト644号　2017年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

牡丹と蘭

仙溪

花材　牡丹（牡丹科）
　　オンシジウム（蘭科）
花器　乾山写石垣文陶花器
　　（森俊山作）

尾形乾山は、寛文3年（1663）京都の富裕な呉服商の三男として生まれ、兄は画家の尾形光琳。野々村仁清に陶芸を学んだのち、元禄12年（1699）37歳のとき京都鳴滝に開窯した。50歳で二条丁子屋町に移住し多くの作品を手がけているが、兄の光琳は絵付で乾山を助け、兄弟合作の作品が数多く残されてる。

写真の花器は乾山の石垣文を写してつくられたもので、平面デザインを立体化するために面取り技法が使われている。

花器だけ見ていると個性が強すぎて花材に悩んでしまう。ところが牡丹を一枝挿してみると、穏やかな表情に変わり、大輪黄色のオンシジウムを添えることで、器の色彩が生き生きしだした。器と花が出逢うことで生まれる美の不思議。

おそらく乾山の皿に描かれた石垣文様も、料理との出逢いで色んな表情に変化しただろう。斬新な意匠は300年前の人達を、あっと驚かせたに違いない。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018年
2月号
No.656

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

見方を変えてみる

今年は明治維新150年にあたり、大河ドラマも西郷隆盛が主人公。今なお人気を博す「西郷どん」のように、大きな眼で遙か遠くを見つめ、視野を広くもち、己の道を俯瞰する。そんな一年にしたい。と、カッコ良く言ってはみたが、健康で日々の仕事を精一杯できればなによりだ。

でも、今までとちょっと違う物の見方をしてみることが、新たな発見に結びつくきっかけになると思う。自分の中に眠っていたものが目覚めることもあるに違いない。視野を狭めず、柔軟に見方を変えてみようと思う。

いけばなでも、普段使わない器にいけると、いつもと違う花になったりする。また、いけた花を一度少し離れた所から見なおしたり、別の角度から見ることで、足りないところに気付くこともある。「見方を変える」のは大事なことだ。

ネコヤナギ

櫻子

花材　猫柳（柳科）
　　ストック（油菜科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
花器　陶大皿（モロッコ製）

以前、アフリカのモロッコで花展をした時、幼稚園児が大勢で見に来てくれた。その時の子供達の笑顔を思い出しながらラッパスイセンをい

けた。ネコヤナギの柔らかな感触が優しく寄り添う。

横から見た奥行き

コデマリ

仙溪

花材　小手毬（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
　　玉羊歯
　　（玉羊歯科・蔓羊歯科）

花器　陶花瓶

コデマリとチューリップを投入にすると、上がる姿と下がる姿の対比が際立つ。チューリップの花色は2種以上にしたい。

横から見た奥行き

ヴロァウン

櫻子

花材　オンシジウム（蘭科）
　　ミニ胡蝶蘭（蘭科）
　　ゲイラックス（岩梅科）
花器　鶴首陶花瓶
　　「ヴロァウン」2種

家元宅での初春の会には、新年のお料理が並ぶ宴席に、花の設えをして楽しんでいる。今年は鶴首花生け「ヴロァウン」に花をいけて飾った。これは京都青窯会作陶展の50周年を記念して考案された焼きものである。

シンプルでモダンを基本とした一輪挿しが青窯会の作家や職人によって様々な技法で生まれていくのが楽しい。

西出真英作の「掻き落とし」、前田安徳作の「鉄釉」を並べて、オンシジウムと胡蝶蘭をいけた。「ヴロァウン」はスウェーデン語の「青い窯」という意味だそうだ。今後も青窯会の皆さんがつくる器が楽しみだ。

横から見た奥行き

立華時勢粧を読む　㊷

わくら＝嫩葉。若葉のこと。

立花秘傳抄　二

通用物之部（つづき）

竹は心のみにかぎらず、二本遣う常のことなり。竹の林と見る時は、三本五本くるしからず。又三本遣う時、一本ゆがみたるは苦しからず。二本ゆがみたるは許さず。

添え竹とて、細き竹を心にあしらう。葉のある竹ならば上を一文字に切るべし。祝言なり。枯れたる竹ならば、先をそぎても苦しからず。不祝言なり。立て様口伝あり。

竹は自ずから正心をかねたりといえど、わくら、水仙などの細く柔らかなる物を、正心にあしらう。常のことなり。然るに玉林の門流には、竹の後ろに松、鶏頭を立て、正心あしらいと見て、前にはあしらいなし。これ竹をよく見するを賞翫としたる道理おもしろし。しかれども花道本一家より出て、末両義に別れたることいぶかし。今様には前に立てるを真のあしらいとし、後ろに立てるを草とす。

竹を片なびきに遣う、常のことなり。両なびきの時は笹の靡き、意得あり。

第九十図
立花　竹除真
竹の胴　擇善子（初版は桑原次郎兵衛）
竹　梅　伊吹　晒木　柘植　熊笹　小菊　水仙
嫩　樫木

竹の請には流枝に意得あり。竹の胴、見越竹、口伝。

三つ具足立ての花の添え竹は、上の節より四五分置いて一文字に切る。さて心の枝と、竹の留まりとの間を一寸ばかりあけるなり。花形の大小によりて変わるべし。

竹の心請の見越には大葉、或いは大輪なる花を用いるべし。竹ほそき物ゆえ取り合いよし。

竹の子は砂の物によろし。立花に立てる時は竹の心より高く立てのぼすべし。

七本竹と云うこと古来よりなき事なるを当意即妙の一曲、誠に名師の修練なり。世人これを努々学ぶことなかれ。竹は一色に立てざる道理分明なり。

砂の物には大竹を賞翫とす。太き竹に葉の付きたるなき時は、生竹にても枯竹にても太きを立て置き、さて細き竹の葉茂りたるを立て添えて心に用うべきなり。三本遣う時はさび竹、くさり竹、仙人杖、切り株竹など取り混ぜて遣うべし。

立花の心、竹太く葉付きよく、しだれ長き時

意得＝心得。

第九十三図
立花　松除真
見越竹　谷久兵衛（初版は桑原次郎兵衛）
松　苔　梅　竹　柘植　椿　著我　枇杷　嫩

学海＝百川学海＝中国宋代の左圭による叢書（種々の書物を集めたもの）。

は、一本立ても苦しからず。

竹太きは葉久しく枯れず、細きは葉はやく枯れるなり。

竹は切りて根をやきて立つべし。又上の節をぬきて水を入れて立つべし。

葉しおるる時は酒をふき、塩水をふく。外に口伝あり。

学海に曰く、竹は八月を以て春とす、とあれど、立花には五月六月を賞翫とする物なり。

竹に苔はうつりよし。晒木はうつらず。

第九十図、九十三図は「秘曲の図」の内の「竹の胴」と「見越竹」と名前のついた立花図である。胴や見越に竹の枝を使うことで花形に厚みをつくっている。第四十六図では砂物らしく太い竹の株を見せたところに筍が伸び上がり、自然表現の面白みを存分に感じることができる。器の砂鉢が竹の根株を連想させる。

※参考文献
『いけばな美術名作集　第三巻　立華時勢粧』（日本華道社刊）
『花道古書集成　第一期第二巻』（大日本華道界刊　思文閣出版刊）
※立花図転載
『華道古典名作選集　立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第四十六図
一株砂物　筍真
寺田清左衛門
筍　竹　百合　松　苔　熊笹　嫩

フユイチゴ

仙溪

花材　冬苺（薔薇科）
　　漉油（五加木科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
花器　陶花瓶

フユイチゴは蔓性の常緑小低木で、地面を這うように枝をのばす。夏から秋に白い花が咲き、冬に実が赤く熟して食べられる。コシアブラの白い枯葉を合わせ、「ティタティタ」という名前の小さなラッパスイセンを覗かせた。森の春の訪れ。

横から見た奥行き

レモンだより
この冬はカボチャのお家に。

竹の立花　<表紙の花>

「冨春軒初春の会」
挿花　杉浦慶弥
花型　直真（真の花形）
花材　真竹（稲科）
　　金明竹（稲科）
　　木瓜（薔薇科）
　　赤芽柳（柳科）
　　栂（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　寿松（松科）
　　椿（椿科）
　　枇杷（薔薇科）
花器　銅立花瓶

タイムリーな竹の立花。清々しい。

南天の立花　<10頁の花>

「冨春軒初春の会」
挿花　桑原仙溪
花型　除真（行の花形）
花材　南天（目木科）
　　臘梅（臘梅科）
　　栂（松科）
　　水仙（彼岸花科）
　　松（松科）
花器　銅立花瓶

ナンテンは「難を転ずる」縁起の良い木。

譲葉の立花　<11頁の花>

「冨春軒初春の会」
挿花　寺川慶枝

花型　除真（行の花形）
花材　譲葉（ゆずりは）（譲葉科）
松（松科）
梅2種（薔薇（ばら）科）
千両（せんりょう）（千両科）
菊（菊科）
小菊（菊科）
枇杷（びわ）（薔薇科）
花器　天女模様銅器

ユズリハは若葉が出たのを確かめるように落葉する。家が代々続くようにとの願いをこめて。

横から見た奥行き

11 頁の立花

10 頁の立花

表紙の立花

桑原専慶流いけばなテキスト656号　2018年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

お紅茶の代わりに

櫻子

花材　ラグラス（稲科）
　　アネモネ（金鳳花科）
花器　ティーカップ

ヨーロッパの美術には多くのアネモネが出てくる。ルノワールやマチスも好んでこの花を描いている。花姿は今とあまり変わらないが、深みのある花色と姿の調和が絵になりやすいのかもしれない。

好きな花は小さくいけて、身近に置いて眺めていたい。大きめのティーカップを花器にして、食卓に季節の彩りを加えるように。

このカップは父が毎朝お紅茶を楽しんでいたもので、母と色違いのお揃いだ。濃いめに淹れたお紅茶にお砂糖とミルクをたっぷり入れて…。何でも沢山入れる父にはぴったりのティーカップ。春に実るラグラスとアネモネを飾った。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
2月号
No.668

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

晩白柚（ばんぺいゆう）

〈2頁の花〉　櫻子

花材　チューリップ（百合科）
　　スイートピー（豆科）
　　菜の花（油菜（あぶらな）科）
　　晩白柚（蜜柑（みかん）科）
花器　紺彩陶水盤（重松康夫作）

久しぶりにテキストでバンペイユウを花といけてみた。暮れにいつも熊本の知人から戴く晩白柚を新年の座敷に飾らせていただくのを楽しみにしている。今年も南天と菊の投入れ、干支とバンペイユウを置いて良い香りを楽しんだ。

1月末にはチューリップや菜の花、スイートピーが長くてしっかりしていたので、相手を変えて再び後ろに置いてみる。早春の淡黄色が萌え出づるようで貴重な春が訪れた。災害を乗り越えて作られた尊い果物。

横から見た奥行き

白梅の盛花

〈2頁の花〉　仙溪

花材　白梅（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　小菊（菊科）
花器　四彩塗分面取高坏（河井透作）

今月号には4作に白梅を使っている。この頁の盛花と10頁の立花は稽古用の比較的若い枝で、4頁の大作投入と11頁の生花は苔のついた花展用の古木だ。4つの梅のいけばなを見比べると、生花の梅が一番梅らしさが感じられる気がする。梅らしさのポイントは太い幹と細い枝の対比にあるようだ。

この白梅の盛花にも、太い梅の苔木を低く重ねて出していれば、さらに風情のある景色になっただろう。その木本来の「らしさ」はどのようにすれば表現できるかを考えること。今回の4つの梅のいけばなから、改めて気付かされた。

横から見た奥行き

ブルーチューリップの花器に

〈表紙の花〉　櫻子

花材　小手毬（薔薇科）
　　エピデンドラム（蘭科）
　　ラナンキュラス（金鳳花科）
花器　トルコ製陶花器

早春に咲く花をチューリップ柄の花器にいけた。温かな光とぬくもりをいち早く感じて花を咲かせるラナンキュラス。花びらの枚数が百枚以上はあると思うが、ゆっくりと大きな花を開いて最後まで散ることなく萼に支えられて咲いてくれる。

コデマリも今年は豊かに花付きも良く力強い。1本からの枝分かれも多くてそのままの形をいける事が出来た。

エピデンドラムも小さな花の集まりで丸くまとまる花だ。同じかたちの花を取り合わせするのはとてもいけにくいのだが、こんな花器と花との組み合わせも今ならでは。

横から見た奥行き

枝物４種

「ジャパンスピリッツin京都」

仙溪

花材　松（松科）
　　白梅（薔薇科）
　　南天（目木科）
　　椿・紅白（椿科）
花器　焼締陶花器（竹内眞三郎作）
場所　京都駅ビル グランビア前

この花器は板状にした土を丸めて細い筒を作り、それを並べてつないだもので作ってあるのでとても重い。大地のような、巨木のような、そんな印象の器だ。敢えて草花を使わずに枝物４種でまとめたが、大きな枝を器が軽々と受け止めてくれた。

嵐山花灯路　桑原仙溪　飯桐 枝垂柳 洋菊２種　栂

立花秘傳抄　三

草之部（つづき）

河骨

非祝言。水ぎわ。

異名、水鏡草。金蓮子

はりがねを入れて遣いてよし。葉しおれやすき物なればつはの葉をかり用いる。惣じて水草水ぎわに遣うに口伝有り。

蓮花、河骨、水あおいなどは池にて切る時、糸にて茎をつよく結び置いて、その下より切るときは久しくしおれざるなり。

紫苑

非祝言。花は上、葉は下、広葉の類さし合いなり。

之於爾。

異名　返魂草

和名　おにのしこくさ　ひとしくさ

花を正心に用いる時は下にかならず葉を遣うべし。花ばかりは遣わぬなり。葉ばかり遣う時は胴より上へは用いず。出生直なるゆえ、副、請に用いず。葉を遣う時は大小をとりまじえて、陰陽を遣いわけてよし。葉使い柏の意気と同前なり。

萱草

祝言、心にも用いる。上中。

時珍曰く、萱本諼に作る、諼は忘なり。さるによって和名にもわすれ草と云う。

一名宜男。懐妊婦人その花を佩びれば則ち男を生ずと云う。

忘憂草。人の憂いを忘れんと欲するにこれを服す故に之を名付く。

ある書にこの花を祝言にあらずと云えり。忘るという名をいむか。この花名の由来をしらざる故なり。療愁草とてその徳ある草なれ

河骨は杜若一色の下段に使われている。それらの絵図を見ていると、まさに沼や池の景色が目に浮かぶ。河骨の花の黄色が、杜若の紫色と白色によく映っている。

第九十八図
立花　杜若一色
杜若一色（の行）　桑原次郎兵衛
杜若　河骨　著莪　※（）内は初版

ば目出度きものなり。

萱草宵より立て置く花ならば、明日開くべき花を指すべし。ひらきたるはしぼみ、つぼみは開くことはやきものなり。必ず下に葉をあしらうべし。

萱草（かんぞう）を真にした立花図には萱草の葉と共に紫苑の葉が効果的に使われている。手彩色のされた図を見ると、萱草の黄色に桔梗の紫色、嫩葉（わくらば）の赤色が効いている。

第十六図
立花　萱草除真
除心の内行の花形　中流枝立　寺田清左衛門
萱草　苔　松　桔梗　樫木　小菊　紫苑
著我　嫩葉

第九十九図
二株砂物　杜若一色
杜若一色の砂の物　西村松庵
杜若　河骨　著我

【前号の訂正】
5頁　・・その実を蓮　と云い、中を・・
6頁　・・巻き葉少なくたてること池中の・・

①ポパム純子さんと。 ②カフェでのレッスン。 ③右から２人目がクララ。 ④公園清掃奉仕をして切った枝とガーベラの生花。

イギリスで学んだ事

桑原素溪（健一郎）

「ジェントリー、ジェントリー（優しく、優しく）」満面の笑みで私の真似をしてくれているのがクララだ。

クララは賢いが人に見せびらかすなんてことは一切せずに、戯けてみせる。誰にでも好かれるタイプだ。ガーベラだって食べる（実際には食べていない）。彼女は唯一、私が滞在中の教室に全て来てくれた。彼女はずっと、ジェントリーと言っている。私の言おうとしている事が伝わったみたいだ。

生け花という概念のないイギリスでお花を教えることになった私は生け花の説明からしなくてはいけない。格式高いという偏見がないので、気軽に生け花に参加してくれる。英語を上手に使いこなせない私は、すべての教室で生徒さんたちに対して、２つのことだけを教えることに専念した。

まず１つ目が「空間の美」である。古来中国絵画で始まったとされる空間における絵画での「気」の表現は西洋絵画には見られなかったものだ。何もないところには何も描けないが、確かにそこに感じる何かは存在している。その何かは「気」であり、それこそが「空間の美」である。空間に対する認識の違いは、花文化にも現れている。フラワーアレンジメントはお祝い事に使われることが多く、綺麗な花を多く使い３６０度どこから見ても綺麗なように花で空間を埋め尽くす特徴がある。一方、日本の生け花は床の間に飾ることを前提としており、正面から見て綺麗なものが評価される。そして花と花、枝と枝の空間に美を感じる心が生け花を生け花たらしめている。日本人や中国人だけが感じるであろう空間の感覚を伝えることは難しいと考えていたが、お弟子さんの中には「何だか分からないけど、この花と花の空間がとても好きだわ。ここは直さないでね。」という方もいたので、花と花の絶妙な空間に特別な感覚を少しは感じ取ってもらう事ができたと思っている。

そして２つ目が一番大切な、「お花に優しくすること」これは私が一番伝えたかったことだ。お花をぞんざいに扱ったり、踏んでもなんとも思わない人たちが時々いる。忙しい日々の中で自分のことで手がいっぱいなのだろうか。私はこの原因が植物と人間の「死」の違いにあると考えている。人間や動物の死は個体的で明確なのに対し、植物の場合は根っこが死んでいなければ他の部分が枯れても死にはならない。植物はどこまでが個体なのか分かりにくいので、「死」そのものが曖昧になってしまうのではないだろうか。私はわざわざ切り花のお花を生けている以上はその命に感謝し慈しむことを彼らに伝えたかった。

デモンストレーションをするとみん

なが次々にお花を生け始める。およそ生け花が似つかわしくないであろう彼らが、一本一本の花を水切りし、葉の一枚一枚を丁寧に撫でていく光景は感慨深かった。一人だけ3回すべての教室に参加してくれたクララは、最終日になるとガーベラを食べてしまいたくなるほど花と仲良くなり、とびっきりの笑顔で笑っている。

最後にはなりますが、教室英語が慣れない私の言葉に必死に耳を傾けながら理解しようとしてくれた皆様、本当にありがとうございました。イギリスに行く2週間前にいきなり連絡をとったのにも関わらず、5週間もの生け花合宿の機会を設けてくださった純子さんには感謝しきれません。長い間お世話になりました。また京都で会えるのを心から楽しみにしています。

ティムさんの庭で

＜9頁の花＞　素溪

花材　薄（すすき）の穂（稲科）
　　百合（百合科）
　　西洋接骨木（にわとこ）（忍冬（すいかずら）科）
花器　陶扁壺（ティム作）

マンチェスターの陶芸家ティムさん宅を訪問し、庭の草木に百合を加えてティムさんの作った花器にいけた。竹のような黒い葉の枝はセイヨウニワトコ（エルダー）で黒い実が生（な）る。魔除けの力があり、映画ハリーポッターでは最強の魔法の杖になっている。

竹真の立花

仙溪

花材　金明竹（稲科）
白梅（薔薇科）
松（松科）
五葉松（松科）
黄花水仙（彼岸花科）
椿（椿科）
小菊（菊科）
花器　銅立花瓶

年末に稽古で立てた立花で、写真は2週間目。そして一ヶ月を経た今も水仙と小菊をかえて玄関に飾っているが、白梅が美しく咲き、キンメイチクの葉もまだ生き生きしている。なんとまあ、である。暖房の無い日本家屋の玄関の間では、冬の間花がよくもつが、それにしてもキンメイチクの水揚げの良さには驚かされる。

横から見た奥行き

被災地の焼き物

仙溪

花材　白梅（薔薇科）
　　椿（椿科）
花器　陶花瓶（金野光賀作）

この花入れは広島県尾道市の陶芸作家によるもので、昨秋京都高島屋での京都新聞チャリティーで入札して手に入れた。作者の金野さん（77）は昨年7月の西日本豪雨の時、裏山からの土石流に約2500点の作品と登り窯も流されてしまった。その時奇跡的に無事に残ったのがこの花入れである。

金野さんはその後、難を逃れた自宅のガス窯で作品を作られているそうだが、再び登り窯で焼き物をつくろうという強い意思を持たれている。いい作品を作り続けるという創作意欲が金野さんを支えている。そんな金野さんの奇跡の花入れに、心を込めて花を生けた。

横から見た奥行き

桑原専慶流いけばなテキスト668号　2019年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五四〇円（消費税込）　http://www.kuwaharasenkei.com

山茱萸（さんしゅゆ）の生花

仙溪

花型　草型　副流し
花材　山茱萸（水木科）
花器　五角陶水盤

これは昨年1月の稽古でいけた生花の約一ヶ月後の写真だ。いけた時は蕾だったサンシュユの花が満開に咲いている。サンシュユの黄色い花は部屋の中でもよく目立ち、そこだけ春の温かな日差しがあたっているようだ。

サンシュユの太枝を使いながら伸びやかに横へ枝を出すには竹筒では軽すぎてアンバランスになってしまう。重みのある水盤を選び、大きめの剣山でいけて、最後に小石で剣山を隠した。

レモンだより

今年5月で7才になる。人間の44才くらいだそうだ。「40にして惑わず」をすでに越しているのだね。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020年
2月号
No.680

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

小手毬　エピデンドラム

〈表紙の花〉　健一郎

花材　小手毬（薔薇科）
　　エピデンドラム（蘭科）
花器　陶花瓶（近藤豊作）

新年会の日に床の間に飾らせてもらった投げ入れです。古典のお花が多い家に彩を副えるべく生けた。

立派な小手鞠だったので伸び伸びと小手鞠の思うがままに器にいれ翌日の新年会の日には水を7センチほど飲み、賑やかに咲いてくれた。

小手鞠のみだと新春の色が出ないので4色のエピデンドラムと共に。前の景色は葉の状態がよく、綺麗だったのでエピデンドラムの葉で作った。投げ入れの特徴のうちの一つである軽やかな花に仕上がった。

横から見た奥行き

五葉松の立花

〈2頁の花〉　山本慶智

花材　五葉松（松科）　南天（目木科）
水仙（彼岸花科）　椿（椿科）
紅柘植（柘植科）　石化柳（柳科）
小菊（菊科）　葉蘭（百合科）

花器　天女文銅花瓶

南天の紅い小葉が胴で良く効いている。

横から見た奥行き

蝋梅の立花

〈3頁の花〉　仙溪

花材　蝋梅（蝋梅科）　松（松科）
菊（菊科）　椿（椿科）
枇杷（薔薇科）

花器　遊鐶耳竹節銅立花瓶

流枝の日光椿が華やぎを添えている。

横から見た奥行き

ラッパズイセンの白花

＜4頁の花＞　櫻子

花材　喇叭（らっぱ）水仙（彼岸花科）
　　チューリップ（百合科）
　　スノーフレーク（彼岸花科）
　　丸葉ルスカス（百合科）
花器　陶水盤

新年を迎えてお正月が過ぎ、休んでいた花市場が稼動しだすと、一斉に春の切り花たちが花屋に並ぶ。ナノハナ、チューリップ、ラッパズイセン、フリージア、スイートピー。近頃はユキヤナギやコデマリなどの春の花木も手に入る。家の外は木枯らしが吹いていても、家の中は冬の花と春の花が季節を超えて共存している。

丁度今の季節を感じる花もいいし、季節の先取りの花もいい。

白いラッパスイセンに白いスノーフレーク。同じ色の花を2種類組み合わせることはあまりしないが、いけてみると花色が印象深くなってくれた。花色の組み合わせを工夫できるのも、春ならではの楽しみ。

冨春軒初春の会　1月18日・19日

自宅での新年会も6回目になる。流派の先生と私で立花を立ててお迎えし、副家元が料理屋と共に細やかに祝宴を演出してくれている。今回から健一郎も投入をいけ、立花を手伝い、花手前の介

添を担当してくれた。

花手前でいける生花（せいか）も毎年変えてきた。若松と千両、若松と椿、梅、水仙、万年青、今年はやや遅めの会期ということもあり、雪柳とチューリップで春の兆しを感じてもらった。

お琴の演奏は鹿野慶正さん、花手前の介添は谷岡慶彩さんにも担当してもらった。

福引きは花九、花政、花フジからの寄せ植えや、公長斎小菅さんからの籠花生けと花、市川博一さんの青白磁花生けと花、花手前の花と筒、そして私が描いた色紙が景品に。

はり清さんの京料理、紫野源水さんの和菓子、美味しい日本酒、はずむ会話、私にとっては至福の二日間だった。

今年もいい仕事ができますように。

仙溪

「美味しい食事」

健一郎

生け花の活動と同時に、生け花をより根本から捉える目を養うべくグループホーム（認知症対応型生活介護）で働いている。グループホームでは職員の手料理を利用者に振る舞う事になっている。職員を含め11人分ほどの一汁三菜を2時間で調理、盛り付け、配膳するというものだ。もちろん利用者さんの対応と並行しての調理なので2時間丸々使う事が出来るわけではない。時間をかけ、こだわりを持ち自分の引き出したい味を少しでも出したいのだが、利用者の方をお待たせするわけにもいかないので、ある程度で見切りをつけなければならない。

時間をかけられないのにもかかわらず、1日3回の食事は利用者の方からしてみれば、私達とは比べ物にならないくらいの大きなイベントである。利用者の方の期待も大きい。少しでも見栄えを良くしようと色を出してみたり、盛り付け方ひとつでも工夫するとご飯は美味しくなる。心臓が悪い方には塩分を控えた中で美味しいものを、糖尿病の方には糖質を控えた中でおいしいものを、味覚の低下が見られる方には味が口の中に残り、味わえるよう餡掛けにし、嚥下機能が低下されている方にはムース食を提供するわけだが、この方達は、後、何回食事をする事が出来るのだろう。これが最後の食事になるかもと考えると2時間と言う時間はあまりにも短すぎる。

食べる事は生きる事である。生命維持のために最も基礎的な事であり、これを無くして生きる事はできない。何かの原因で食べる事ができなくなると途端に衰弱し痩せ細り、亡くなられる方達を見送ってきた。食事があまり進まない方には色々な方法で食べてもらおうと試みる。目の前で大きな口で笑顔いっぱいで美味しそうに食べてみたり、最初の一口を口まで運び、美味しいものだと認知してもらう事で次の一口に繋がったりと、いくつかの作戦がある。美味しいものを食べている時の姿は好い。ソースのついたお皿を舐めたりと反応も飾り気がなく純粋な食事は好例である。

お昼ご飯だけでも週4日ほどこしらえていると、少しずつコツというものが分かってくる。どれぐらいの量のみりんで甘さ、照りが出てくるとか餡掛けのトロミの容量も見当がつくようになった。味見を繰り返して作っていると、自分の好みの味に近づけようと酒を足したり、砂糖を足して調節しようとする。理想の味のイメージが定まっていないと何とも形容し難いボヤけた味になってしまう。和洋中どのジャンルを作っても質の高い調理をこしらえる人がいる。面白い事にその料理の全てにその人らしさはやはり感じるのである。それぞれの分野でその人が料理を作る際に掲げる理想の具体さ、質の高さは滲み出るものなのだろうか。

「生涯にわたって自分の好きなものを食べ続けられたら良いな。」と幼い頃祖父とよく話していた。朝6時ごろに目が覚め、台所の近くを通ると物音が聞こえた。朝8時からの2人での朝食の用意をしている後ろ姿が忘れられない。登校時間のギリギリに起き、半分寝ている状態で食べていた朝ごはんが出来るまでの過程を知ってしまったのだ。大好きなピラフとベーコンとスクランブルエッグ、ジャーマンポテトを教えてもらった。今でも家で作って食べると祖父がまだ隣にいるかのようだ。その人が作った味を引き継ぐとその人の存在がありありと思い出させられる。それは夢で見るその人よりも現実味があるものなのかもしれない。

副家元が作るご飯は2時間から長い時は3時間かけていることもある。次の日が忙しければ夕食後に次の日の下ごしらえをしている。家元と2人でする食器洗いの時間も入れると家族で食事をするという行為のために使っている時間は多い方だと思う。その時間が家族一人一人の心の豊かさに大きく影響している。

お腹を満たすだけなら手段を選ばなければものの5分で満たす事ができるだろう。多くの人は学び、娯楽を楽しみ、友達と出かけたりと忙しすぎて毎日の食事の重要度、優先度が下がってしまう。でも、たとえ自分1人での食事の時であっても、美味しく食べるための努力をしていると、常に心身ともに満たされている状態になれる。そして自分が満たされると初めて人に働きかける余裕が生まれる。

今は副家元の料理を少しずつ教えてもらっている。塊肉の焼き方や、おせち料理、日常的な家庭料理まで自分の好きなものを少しずつ覚えるようにしている。調理の過程を知ってから食べた味は、今までの料理とは違うものになっていた。味の複雑さを理解したくなったのだ。

ある人が言った。「名作とは無限のお金を出そうと、無限の時間をかけようが真似できないものである」

知らない人、あるいは機械が作った失敗のない誰の口にでもあうよう作られた食品を食べるより、大切な人を思って情が込められた家の味は各家ごとの名作である。

毎日家に帰り「ただいま帰りました！」の一言の前に、今日の晩ご飯を聞く習慣はなくなりそうにない。

手作りのお重で迎えるお正月。

満作の生花

〈9頁の花〉　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　満作（満作科）
花器　饕餮文獣耳銅花瓶

枝いっぱいに黄色い花が咲いている。太枝の立派なマンサクが手に入ったので生花にいけた。ほのかに甘い香りがあり、花も大きめなのでシナマンサクではないかと思う。

早春、ほかの花に先立って「まず咲く」ことからマンサクと呼ばれるようになったそうだ。一つの花には黄色い細長い花弁が4枚出るが、数個かたまって咲くのでもっと多くあるように見える。

冷たい山の中で満開のマンサクに出会ってみたい。きっと心を奪われるに違いない。

横から見た奥行き

京都嵐山花灯路２０１９ いけばなプロムナード

＜９頁の花＞ 仙溪

会期　12月18日～22日
会場　二尊院門前

花材　ビロウ（椰子科）
　　グロリオサ（百合科）
　　コニファー・ブルーアイス（檜科）
花器　陶花器（市川博一作）

ジャパンスピリッツ in 京都２０２０

＜10頁の花＞ 仙溪

会期　12月29日～1月5日
会場　ホテルグランヴィア京都前（京都駅ビル2階）

花型　生花　二種挿し
花材　蝋梅（蝋梅科）
　　椿（椿科）
花器　陶花器（阪野鳳洋作）

檳榔の枯葉　仙溪

ビロウは椰子の仲間で東アジアの亜熱帯の海岸付近に自生する。葉が掌状に広がり、葉先は細かく裂けて

垂れ下がる。枯れても撥水性があるため屋根や笠の材料にされる。沖縄ではクバと呼ばれ、今でもクバ笠が作られている。

また、ビロウは平安時代、大変神聖視された植物で、上皇以下、四位以上の上級貴族が乗る車はこのビロウの葉を裂いて編んだもので覆った檳榔毛車であった。

さらに天皇の即位式の前に禊ぎ祓いのためにこもる百子帳という仮屋は頂上がビロウの葉で覆われる。ビロウの葉は風をおこすことができるので、邪気を払うと考えられていたのだろう。

そんな謂れがあるとは知らずに二尊院の門前にいけたのだが、なんとも相応しい選択だったと感じ入っている。

レモンだより
一緒にスヤスヤ。

桑原専慶流いけばなテキスト680号　2020年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

連翹（れんぎょう）と百合

仙溪

花材　連翹（木犀科（もくせい））
　　透かし百合2種（百合科）
花器　陶花器

百合は本来夏の花だが、園芸品種がほぼ一年中花屋で売られるようになった現代では、夏以外であっても花色の選び方といけ方によって、良い取り合わせになることがある。

作例の2色のスカシユリもそれぞれにいい表情を見せてくれている。

園芸化された花には野の花のような風情はないけれど、溌剌（はつらつ）とした明るさがある。自然の景色を思わせるようないけばなには向かないが、現代的な雰囲気のいけばなで持ち味を生かしたい。

レンギョウとスカシユリが作る黄色の輝きの中で、もう一方のスカシユリの臙脂（えんじ）色と葉の緑色が際立つ。

横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
2 月号
No. 692

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

水仙一色砂物

<2頁の花>　健一郎

花型　二株　砂の物
花材　水仙（彼岸花科）
　　寒菊（菊科）
　　小菊（菊科）
　　著莪（菖蒲科）
花器　染付青磁砂鉢

去年から自然のままに育った水仙を仕入れてもらっている。手間のかかる作業だが、僕のわがままに花屋さんと農家さんの協力があって、勢いのある水仙を生けることができている。今回は前回に比べ、黄色い葉の比率が多かったので、水仙の終わりの季節を思わせる砂物になった。大好きな緑の綺麗な格好良い形をした葉が一枚一枚が際立ち、花がより引き立っており、寒菊も綺麗な花を咲かし、良い景色を見せてくれている。

器は鴨が泳いでいるのであろうか。その情景と色が水仙によく似合う。

水仙の枯花

斜め横から

春の除真立花

〈3頁の花〉　仙溪

花型　除真立花
花材　山茱萸（水木科）
　　木瓜（薔薇科）
　　猫柳（柳科）
　　辛夷（木蓮科）
　　松（松科）
　　椿（椿科）
　　菊（菊科）
　　小菊（菊科）
　　葉蘭（百合科）
花器　銅立花瓶

4種類の花木に、松、菊、小菊を加えて春の立花の参考に立てた。

細い枝ばかりの場合、晒木か苔木を添えると景色に厚みがでる。それらがなくても、葉蘭や枇杷の葉があれば役枝の出口をしっかりした感じにできる。

前からは見えないが、人で言えば腰のあたりにも松と椿を出している。

躍動する生命力と、静かな水際が立花の醍醐味だと思う。奥が深い。

寒紅梅

〈4頁の花〉　仙溪

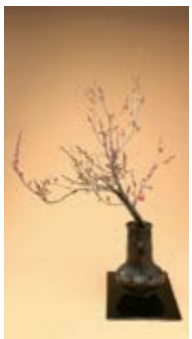
花型　生花　草型　副流し
花材　紅梅（薔薇科）
花器　饕餮文銅花器

1月中頃、健一郎夫婦が京都御所の梅林に写真を撮りに行っていた。すでに満開の梅もあったそうだ。おそらく去年の暮れから咲き始めたのだろう。

寒中に咲く梅を寒梅と呼んでいる。寒中とは小寒から節分までのことを言い、寒の内とも言う。今年は1月5日から2月2日までの間が寒の内だ。

梅は寒さの中で咲くことが好きなのに違いない。そうすることが良い実を結ぶことを分かっているのだろう。寒さを楽しんでいるようにも見える。草木の中の君子と称えられるのも納得である。

健一郎撮影



瓔珞の花

〈5頁の花〉　仙溪

花材　土佐水木（満作科）
　　牡丹（牡丹科）
花器　龍耳瑠璃色釉陶花瓶

トサミズキの花は瓔珞のようだ。昨年の7月号で紹介した観音菩薩の壁画（写真㊧）で天蓋からぶら下がったり、菩薩が身につけている煌びやかな飾りが瓔珞だ。インド貴族の装身具が仏教に取り入れられたものらしい。

そんなトサミズキの花に高貴な花と器を合わせた。鉢から切りたてのボタンを一輪。中国の花器にいけると、不思議な美しさを見せてくれた。

トサミズキの葉（4月頃）

出展：http://www.zoezoe.biz/2010_syokubutu/ka_6_ma/199_mansaku/corylopsis/tosa_mizuki.html

花のちから

仙溪

「はるかのひまわり」が大輪の花を咲かせて、インドネシアの人々を勇気づけていると、ＮＨＫＢＳ放送「国際報道２０２１」で紹介されていた。

３年前の９月にインドネシア、スラウェシ島を襲った地震と津波は、死者・行方不明者約５千人という大きな被害をもたらした。現在も避難生活を送る人たちが、ヒマワリの花に心を癒やされている。

「家族や友人を亡くして心が押し潰されそうになった時、ヒマワリから力をもらった」と現地の人。

「はるかのひまわり」の種を日本から届けたのは兵庫県の阪本勇さん。仕事で10年前からスラウェシ島を頻繁に訪れていたことから、現地の人たちを励ましたかったそうだ。

「はるかのひまわり」は26年前の阪神淡路大震災で、小学６年生で亡くなったはるかちゃんの家があったところに咲き出たヒマワリだ。「はるかちゃんがヒマワリになって帰ってきた」。

それからそのヒマワリの種は多くの人の善意によって様々な場所に届けられ、多くの人を励まし続けている。無心に大輪の花を咲かせるヒマワリが、人に代わって温もりを届けてくれている。押し潰されそうな人を勇気づけている。

伸びる空間

＜6頁の花＞　仙溪

花材　小手毬（薔薇科）
　　薔薇（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
花器　陶花瓶

チューリップは上に伸びる空間をあけておきたい。コデマリとバラは意識して前方へ出している。

集めて強める

＜7頁の花＞　仙溪

花材　河柳（柳科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
　　トルコ桔梗（竜胆科）
花器　陶水盤（伊藤典哲作）

どんな雰囲気にしたいかを決めて、同じ種類の花材を分散させるか集めるかを考えればいい。

『聴覚』

健一郎

私が最初に記憶している音は、幼稚園児だった頃に祖母が子守唄にかけてくれていた『トルコ行進曲』だ。寝る前に昔話の後にCDをかけてくれた。楽器はフルートのみで心地がいい。行進曲であったが自然と眠りにつけるようになった。音楽を聞くことは好きであったが、演奏する方は得意でなかった。歌うときは音程がとれず、楽器を触っても思うように指が動かない。母親は私にピアノを習わせようとしたが、踊ってばかりで、仕方なしにサッカーをやらさせたようだ。

あの頃より二十程歳を重ねた。色々な音を聞いているはずなのだが、記憶に鮮明に残っている音は音楽が多い。私は言葉の発明が大きく聴覚を退化させたと考えている。音が意味になるということは音である要素が少なくなるからだ。空耳は自分の耳が捉えることのできる言葉であるのもその例だろう。音楽もそれぞれの地域でそれらしい音階（意味）を与えているものである。

いくつかのジャンルの音楽を聞いた。回数は音楽プレイヤーで聞くことが多かったが、やはり心揺さぶられる音楽体験は、生のものであった。

少年時代は祖父がずっと聞いていたジャズ。祖父といる事が多かったので、自然と影響を受けた。上海に行った際、祖父とタバコ屋さんで大好きなキューバの葉巻を選んでバーの席につき、僕がリクエストした曲を演奏してくれたことが記憶に残っている。どんな曲だったかも思い出せず映像だけの記憶だが、初めての生の音楽体験だった。当時小学生の私にとって全てが新鮮だった。学校から行かせてもらった、京都市交響楽団の演奏の迫力を今でもよく覚えている。パイプオルガンという楽器もその時初めて知った。

小学高学年から中学生の頃は日本、イギリス、アメリカのポップ音楽を聞いていた。日本の歌手は親に頼み、コンサートに連れて行ってもらったが、感心したのは舞台装飾や衣装で、音は、音楽プレイヤーでの体験とさほどに変わらなかった。

高校時代は日本のロック音楽に傾倒していた。耳で聴くのではなく、体で聞く体験をした。ロックフェス、音楽ライブでは頭、体を揺らしバスドラムで心臓を揺らされ、人の上で転がり回っていた。生の音の体験として面白いものだった。この頃はCDで聞くと音が弱く感じるようになり、ライブに行くことが増えた。そして、この時から音について不思議な気持ちを抱くようになった。

人間の耳には聞こえていない2万ヘルツ以上の高周波（音の高さ）は体と心の健康をつかさどっている脳を活性化し快適感をもたらすことができるらしい。YouTubeやCDは人間の音に聞こえない音を録音していない。生の音楽は低周波、高周波、関係なく私の全皮膚を振動させ、聞くことができるから特別なのかもしれない。そして、音は聞こえたその瞬間から消えて無くなっていく。花の命よりずっと儚い。この音の儚さにオーラがある。録音した鳥の鳴き声、水の音を家で聞いてもそれはただの複製物でしかない。

ロックと並行して、ヴァイオリンの音がすごく好きで、聞きに行っていた。そして、大学時代には小澤征爾の演奏を体感した。音の振動が自分に伝わり、理屈なしで心を動かされた。音で感情が込み上げ、胸が苦しくなった初めての経験である。なぜ圧倒されたのか考えているうちに音楽とは何か、音とは何かと考えるようになり、現代音楽に関心を持つ。ジョンケージ・武満徹や音に挑戦し続ける坂本龍一に興味を持った。

グループホームで働くようになってからは、日本の季節を題材にした童謡に強い共感を受けた。日本の自然が作らせたと思えるほどの歌詞と綺麗なメロディーの流れは聞くほどに感激する。幼い頃に聞いていたはずなのに身体へ染み込むようにして聴こえる。今までボーカルの声を言葉としてではなく一つの楽器にも近い、音として認識していたのだが、童謡の美しい詩が味わい深い。

祖母から子守唄にクラシック音楽を刷り込まれ、祖父といる安心感の側でジャズを聞き、ポップ音楽を耳で聞き、ロック音楽を体で聴き、現代音楽を耳と頭で聴いた後はグループホームで童謡に浸った。そして今は、体を自然に溶かし、自分自身もノイズとなり、音として在ることが気に入っている。その時々で自分にとって、いいものを聞いて過ごしていたい。最近は音楽より、御所や鴨川で寝転がっている方が好きな音に出会える。

よく意識して音を聞くことがある。目を瞑（つむ）り、静止する。自らは、音を立てず耳をたてる。初めは自身の呼吸に意識がゆくが、次第に自然と、周囲へと注意が向く。自分を少しづつ無くしてゆき、その場に自分を溶かす。自分に当たる風の音を聞くと自分が今ここにいた事を思い出す。風が吹き葉が揺れる。そこに葉がある事に気づき、目には見えないが風の存在を確める。目に見えないが耳には音として聞こえる。

今ここに注意を向けて耳をたてると、さまざまな音が聞こえる。聞こえていたはずだったが聞いていなかったのだ。私たちは常に音という情報に晒されている。過去や未来の自分について考えることがよくあるが、最も大切な今の自分は耳を研ぎ澄ますことで強く認識できる。

この半年ぐらいは突発性の難聴と付き合いながら生活している。飛行機の離着陸の際に耳が詰まったように感じるときの耳閉感が、疲れが溜まると現れる。酷い時は痛みを伴う。落ち着きがない性格が体に無理をさせてしまっていた。今は何もしない時間を大切にしている。音楽を聴くと、普段に比べ、1オクターブ低い音に聞こえ、疲れの度合いに比例して音が反響して聞こえる。菜月はその事を知ってエコーがかかったような声を振動させて話しかけてくるのでまいる。音楽も長い間楽しめていない。無くして初めて大切さに気がつくと言うが、その通りである。

聴覚の大きな特徴として亡くなる直前まで音が聞こえると言うことを、介護職として人を看取るときに初めて知った。意識レベルが低下して声が出ない状態であったが聞こえていると信じて声かけをしていた。相手が聞こえていると信じて話す声は独り言とは性質が異なるが、自分の声がよく聞こえた。話すことで普段言わないようなことでも、胸の奥底で燻っていたような言葉が出てくる。日々の言葉を見つめ直す必要を考えた。

ついこの前にグループホームで1人の利用者を看取ることができた。理想的な老衰で、無くなるまで日々接することができ感謝している。僕が働き始めた初日からお世話になっていた利用者で人として大切なことを学んだ。会話が少しづつ難しく

なった頃から個室で2人きりでたくさんのお話をした。

看取るその瞬間はなんとかご家族に来てもらうことができ、逝かれた。本当によかった。在る力。存在力とでも言おうか、そんな言葉が頭をよぎった。人がそこにいる事は大きなことだ。次の日、その部屋から一切の音がなくなり、匂いだけが残っていた。

音は同等ではなく、全て自分で選んでいる。意識すれば鳥の声、虫の声を聞き取ることができるが、注意を向けることが難しい。意識して選ぶこともできるが、ずっと意識を聴覚に向けることは難しい。

日々を自分の聞きたい音が聞こえるように癖をつけるといつも心地よく過ごせるに違いない。周りの環境を変えることは難しいが日々の言う言葉を改めるだけでいい。

声が出なくなるまでは、自分が一番聞いている言葉は、自分が話す言葉である。誰に何を話そうが、誰よりもその言葉を近くで聞いているのは自分だ。そう考えると少しは自分と同じように人に対しても接することができるのではないだろうか。人を大切にしていることはその実、自分を労る事になる。

早春の色合い

＜表紙の花＞　櫻子

花材　白梅（薔薇科）
　　菜の花（油菜科）
　　スイートピー（豆科）
　　晩白柚（蜜柑科）
花器　手付舟形陶水盤

今年の冬は暖冬なのか厳冬なのか、週代わりで気温が変化し温度調節が難しい年となった。

昨年末に訪れた植物園には楓の大木が紅葉していて見事だった。周りの道には色づいた落ち葉が敷き詰められて大地を温めているようで、スノードロップやナルキッサスの花が控えめに咲いていた。

今年も干支の置物と一緒に晩白柚を新年の花として飾らせていただいた。その後も食べてしまうのがもったいなくて、早春のいけばなの彩りとして一緒に置き合わせた。

白梅と菜の花とスイートピー。大地から淡黄色が萌え出る。穏やかで平和な春がきますように。

オンライン講座修了のタイミングでレモン登場！

いつのまにか、、、　僕も撮って～！

ジャパンスピリッツ in 京都

12月29日～1月5日　京都駅ビル
出品：桑原仙溪
花材：松２種　水仙　バラ２種
花器：陶水盤（ザールバーグ作）

上座部仏教＝南伝仏教、テーラヴァーダ（長老の教え）仏教。釈迦の戒律を厳格に守る保守的な仏教。スリランカ、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオスに伝わる。

スリランカのガードストーン

仙溪

古代インド人は宇宙の生成や豊穣多産を、壺から蓮が生え出る図像に託していた（写真①）。その命の源としての壺のイメージは、その後どのように展開してゆくことになったのか。

インドの南東にある緑豊かな島国、スリランカには紀元前3世紀に仏教が伝えられ、現在も人口の約7割が仏教徒である（上座部仏教）。

スリランカ北部の都市アヌラダプラにあるアバヤギリ大塔（写真②）は、紀元前1世紀建立の仏塔で、5世紀初めには5千人の僧がいたことが中国仏教僧法顕の『仏国記』に無畏山寺の名で記されている。当時は大乗仏教の研究もする仏教世界の中心的研究機関であった。

仏塔（ストゥーパ）に至る道の両側には、石で造られた壺が置かれ（写真③④）、壺から様々な動植物が生まれ出る石の浮彫が参拝者を出迎える（写真⑤）。

「壺」は水の象徴であり、水は生命の源と考えると、生命世界の母胎をイメージして造られた仏塔の入口に相応しい。

古代スリランカの仏教寺院遺跡には特有の装飾として、ムーンストーン（サンダカダパハナ）とガードストーン（ムラガラ）がある（写真⑥⑦⑧）。寺院に入るにはこの半円形のムーンストーンの上を裸足で通ることになる。神聖な領域に入るための禊ぎの役目があるのだろう。そのムーンストーンの両側にあるのがガードストーンだ。

全身を宝飾で着飾った男性が片手に発芽する枝を持ち、もう一方の手には壺を乗せている。この像は蛇神王ナーガラージャで、頭の後ろに頭が7つあるコブラが見える。（写真⑧）

蛇神ナーガは地底世界を統治し水や雨とも関係が深い。仏教でも釈迦が瞑想している間、ムチャリンダというナーガラージャが嵐から釈迦を守ったという。

そんなナーガラージャが水を象徴する壺を持ち生命を活気づかせ、豊穣と繁栄を約束しつつ聖域を守護してくれている、そんなイメージが湧いてくる。

この生命が生まれ出る壺はプルナガタ、又はプルナカラサと呼ばれ「満瓶」と訳されているが、プルナ（満たされた、豊穣、無限）のガタ（もしくはカラサ＝壺）なので「豊穣の壺」「繁栄の壺」と呼んでもいいだろう。スリランカではプンカラサと呼ばれ、現在も幸運と豊かさのシンボルとされている。

古代インドで生まれた「満瓶」のイメージは、微妙に変化しつつそれぞれの仏教国に引き継がれて行った。

壺がもつ生命世界の母胎としての観念を、一華道家として見直してみたい。

①

プルナガタ（満瓶）のレリーフ。南インドアマラバティ仏教遺跡。紀元前2世紀頃。

出展：https://vmis.in/ArchiveCategories/collection_gallery_parent/page:3?id=491&siteid=160&minrange=0&maxrange=0&count=24

②

アヌラダプラのアバヤギリ・ダーガバ（大塔）。紀元前1世紀。この高さ75mの大塔は、かつて高さ110mのドームで覆われていたそうだ。

③

④

⑤

参道には石の壺や壺から動植物が生まれ出るレリーフが見られる。

出展：②〜⑤ https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g304132-d3600154-Reviews-or15-Abhayagiri_Dagaba-Anuradhapura_North_Central_Province.html#photos;aggregationId=101&albumid=101&filter=7

⑦

⑥

スリランカ北中部の古都、ポロンナルワの仏教遺跡群の 1 つで「ワタダーゲ」と呼ばれる仏塔跡。元々はドーム状の屋根に覆われており、中央の仏塔を 4 体の座像仏が囲む。四方に門があり、それぞれの階段下に半円形のムーンストーン（サンダカダパハナ）と一対のガードストーン（ムラガラ）が置かれている。12 世紀頃の造立とされる。密林に埋もれていたのを 19 世紀に発見された。
半円形のムーンストーンには蓮華の周りに唐草、馬、象、鳥などが彫られている。スリランカ北部は南インドから何度も侵略を受けた歴史があり、古い時代にはあった牛がこのムーンストーンにいないのは、侵略者がヒンズー教徒だったためと推測されている。

出展：⑥⑧ https://en.wikipedia.org/wiki/Muragala　⑦ https://lonewolf17.com/polonnaruwa-quadrangle-vatadage

⑨

蓮が生え出る壺（プルナガタ）のみが彫られたガードストーンも見つかっている。

⑩

バーマナと呼ばれる像。建物を支える姿をよく目にする。様々な解釈があるが、その 1 つに財宝の神クベーラの手下であるヤクシャ（夜叉）の 1 人で、もとは鬼神だが富を守る役目を持つとされる。
一方、古代よりインドにおいて、ヤクシャは聖樹に住む精霊で、人々に畏れられる存在である反面、無尽蔵の生命力を有する豊穣多産をつかさどる神でもあり、安全・安泰・繁栄の守護神と考えられている。

出展：⑨⑩ https://thuppahis.com/2017/12/08/the-guard-stones-of-ancient-sri-lanka/

⑧

ワタダーゲのガードストーン。聖域の守護神と推測される。コブラフードをつけたナーガラージャ（蛇神王）が片手に萌芽する枝を握り、片手に繁栄の壺を持つ。壺からは蓮の花と葉が生え出ている。足元の小人も守護神としてのヤクシャと思われる。

桑原専慶流いけばなテキスト692号　2021年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

トルコ染付けの器

<12頁の花>

櫻子

花材　青文字（楠科）
　　小手毬（薔薇科）
　　チューリップ（百合科）
花器　トルコ花文陶花瓶

トルコへ旅をした思い出に手に入れた花器。海外で大きな花器は中々見つからないし、もし見つけてもどうやって持ち帰ろうかと悩んだ末買うものは少ない。

イスタンブールのグランドバザールには伝統菓子などをはじめ、民族衣装、スカーフや絨毯、宝石、タイルなどありとあらゆる物が売られている。5000もの店が軒を連ねている中に一軒だけある染付けの陶器店でチューリップ柄の花器を買った。

そんな思い出の花器なのだが、花柄の器に花をいけるのは中々難しい。器の絵柄も引き立てながら負けない様に。青文字も小手毬もチューリップも満開のタイミングで。

横から見た奥行

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022年
2月号
No.704

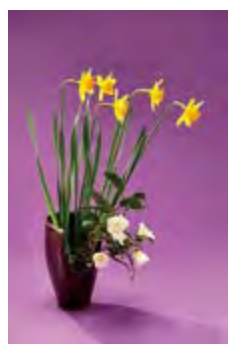
編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

春の兆し

＜表紙の花＞　仙溪

花材　喇叭水仙（彼岸花科）
　　椿「白侘助」（椿科）
花器　飴色釉陶花器

この花器の飴色は雪融け水が滴る岩肌のようだ。春の兆しを感じる花が良く映る。括れた器形に自然の息吹を感じる。



鮮やかな花色

＜2頁の花＞　櫻子

花材　赤芽柳（柳科）
　　アネモネ（金鳳花科）
　　ミリオクラダス（百合科）
花器　ガラスコンポート

まだまだ寒い季節。心も体も萎縮しがちだが、部屋にアネモネがいけてあるだけで、気持ちが明るく晴れやかになる。

アネモネにはユキヤナギやコ

デマリのような小花の花木か、クロメヤナギやネコヤナギがよく似合う。

咲いた咲いた

＜3頁の花＞　仙溪

花材　青文字（楠科）
　　チューリップ2種（百合科）
花器　陶コンポート

チューリップの野生種は地中海沿岸から中央アジア、中国天山山脈、西シベリアの広い範囲に原生する。そんな異国の花が私達の暮らしを彩ってくれている。

有楽椿

＜4頁の花＞　仙溪

花材　啓翁桜（薔薇科）
　　アイリス（菖蒲科）
　　椿「有楽椿」（椿科）
花器　小紋柄陶花瓶

ウラクツバキの紫がかった薄紅色は華やいだ印象。シャープな葉と仄かに香る小さな花に独特の存在感がある。ケイオウザクラ、アイリスと、小紋の器。織田信長の弟、有楽斎も気に入るだろうか。

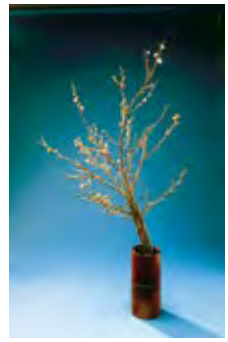
共に作る

＜5頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　啓翁桜（薔薇科）
花器　煤竹竹筒

生花の型には華道が生み出した普遍的な美しさがある。手に

した花材で美しい姿を作るわけだが、いけ終えた後も次々花が咲いてくれるのが理想だ。形を作る時、花材によって力加減や撓(た)め方を変える勘(かん)が必要だが、花の協力を得て共に作るという謙虚な気持ちを持っていたい。



レモンちゃん

お正月の合間にいけばなの色紙を描きました。ときどきレモンちゃんがチェックに来ます。

桐　垂柳檜葉

＜6頁の花＞　健一郎

花型　生花　二種挿し
花材　桐（桐科）
　　垂柳檜葉（檜科）
花器　龍手付銅花器

挑戦的な生花だ。真逆の性質を持つ植物が銅器の中で出逢っている。それぞれの個性が思う存分に発揮されている。季節を思わせる取り合わせなら違和感がなく、どこか説得力がある。中国では鳳凰が止まる木として神聖な植物とされてきており、その文化は日本の花札を見てもその影響が見られる。格好のいい枝に恵まれた。

松一色

＜7頁の花＞　健一郎

花型　除真立花
花材　松（松科）
　　蛇の目松（松科）
　　晒木
花器　遊環付銅花器

日本中どこへ行っても松を見かける。葉もさることながら枝振りにいつも魅了される。私がよく鑑賞する木の中の一つであ

る。一色物にされる植物には複雑な特徴、多面的な魅力を持っていて格好が良いものが多い。それはどれだけ人に見られたか、或いはどれだけ人の身近にあったかが強く影響されていると思う。松、水仙、桜、杜若、蓮、楓、菊。恐らく他にも一色ものの様式に耐えうる植物は多く存在すると考えている。

『隠居生活』

健一郎

ここ一年くらい家元に隠居生活を勧めている。自分が家元になれるよう席をあけてもらおうとして半分冗談、半分本気で勧めている。それは自分が最強の家元になった後に隠居をしたいと強く願っているからだ。隠居をするためには人に伝え、継承させることが必要である。

300年程前、江戸の町人の間では隠居がブームだったそうだ。そうでもなければ1日仕事である立花をこさえることは難しい。そして多くの人の夢は隠居をすることだったらしい。当時は公的な年金制度も整っておらず、金銭に余裕がないとできなかった。今よりハードルははるかに高いだろう。隠居後の道楽は寺参り、囲碁、将棋、園芸、釣り、骨董などがあった。寺参りが一番人気があったらしい。今でいう旅行のようなもので他所のものを食べ、綺麗な景色を見て、お土産を買い自分の家に帰った。

元禄の立花の流行と共に格好の良い枝を探して売る人が徐々に増え、今の焼き芋屋さんの様に歩きながら売って回る人もいたそうだ。江戸時代は植木職や、植木に関わる人が一番多かった。明暦の大火以降の園芸ブームから広い農地を活用して樹木や花卉の栽培を行い、それは植物園のような規模であったという。経済的に苦しい御家人の間では内職として苗木の生育や盆栽作りをする人があった。「鉢物師」「苗物師」が生まれ、花屋さん、種を売る人と業態が分化した。長屋の路地裏にまで鉢植えが置かれるようになった。この時が園芸の全盛期であろうか。趣味が細分化された現代とは違い熱中の度合いや、互いに自分の鉢を見せ合い、笑っている姿が目に浮かぶ。

隠居とは呼べないが、私は悠々自適の生活を送っている。時間だけの尺で見れば、隠居と似たようなものなのかもしれない。時間を沢山持っており、予定のない日が沢山ある。こんな幸せなことはない。自分がしたいと思ったことを自分の都合で初め、いつでも中断することができる。誰に気も使わないので気が楽だ。だがしたいことが無い場合を考えた途端に時間があることに対して恐怖に近い感情を抱く。隠居後に打ち込めることや楽しみが必要だと多くの人が直面するとよく聞く。

今思い返すと学生時代、僕を含めて周りの友達も暇が怖かったのかと思う。常に予定を詰め込みスケジュールに忙殺されることで暇を忘れようと、距離をおこうとしていた。そして予定があることは自分の価値が認められてると感じる。1人でいることに対するなんとなくの寂しさも混ざっていたかもしれない。何もしてなくても十二分にその存在はかけがえのないものなのに。存在価値が認められないと思っているのは自分だけであって周りからの評価は関係がない。第一、人によって評価される筋合いなんかあるわけがない。

人のために時間を使い、生きる人生も素敵だ。なかなかできることではない。だがそれは本当に人のためなのだろうか。暇を忘れようと、自分を欺く為に時間を使っていたとしたらもったいなく感じる。自分の価値を低く評価している。時間をどう使おうがそれは自分の時間である。

何かの雑誌に面白い記事が載っていた。その記事によると1980年以降、世界中の人々の余暇の時間は減少しているという。昔より労働時間が短くなっているのに時間が足りないと多くの人が感じているそうだ。徒歩でなく新幹線に乗るようになり、手紙でなく電子媒体上でやりとりをするようになって久しいのにも関わらずだ。人はどこまで忙しくなるのだろう。明日食べるものがないので狩りに行った時代から文明は移り変わり、時間ができたように思うのだが。私の周りに食べるものに困っている人はいない。なんて恵まれているのだろう。だが時間には追われている。

労働時間が短くはなっているものの、多くの人は時間の大半をお金を生み出すために使っている事になる。働くことは大切であるが、なんのために働いているかは一度ゆっくり考えてみても良さそうだ。

私は休日に御所で通行料を支払ったこともなければ、鴨川で寝そべって金銭を求められたこともない。今のところ豊かな気持ちになるのにお金はあまり関係がないらしい。

今は隠居でこそないものの時間のある日々を過ごしている。自分に素直になりしたい事だけしている。最強の家元になるためにしなければいけない事を一つづつこなしていこうとしていたが、今は意識をしていない。現在は習慣化され、後は時間を待つのみになった。全く無理はしていない。毎日が刺激的で日常をゆっくりと味わっている。隠居後、考え方は変わっていると思うが、今は日本各地に数年づつ住み、各地の四季を肌で感じて周りたいなと考えている。

花伝書を見る

立花　檜際真
「松の前置」冨春軒
檜　晒木　沢水木　水仙
松　苔　枇杷　樫木
（立花時勢粧・下　秘曲の図）

立花時勢粧「松の前置」

水際の松と中央の晒木がつくる深山幽谷の景色。水仙は仙人のようである。檜の曲線と沢水木の直線が絶妙。苔生した小枝が効いている。　仙溪

花の芸術

ART OF FLOWER

2022年3月2日(水)→7日(月)

1期　3月2日(水)・3日(木)
2期　4日(金)・5日(土)
3期　6日(日)・7日(月)

2日(水)、4日(金)、6日(日) は午前10時～午後6時
3日(木)、5日(土)、7日(月) は午前10時～午後4時

入場時間は各日閉場30分前まで
閉場時間が早くなっておりますのでご注意下さい

大丸ミュージアム〈京都〉［大丸京都店6階］

入場料（税込）1,000円
大学生以下無料

桑原専慶流

KUWAHARA SENKEI RYU

いけばなって何だろう

いけばなは花と協力することで生き生きとした美をつくりだす芸術です

自然の一部を切り取り器に入れることで花たちが新たな物語を語り始めます。
花と良い関係を築いて心を通わせ、それぞれの個性を存分に発揮させる。
それにはいつ頃どんな環境に育つのかを知り、花を生かす技術が必要です。
花は大切に扱い心をこめていけると必ずそれに良い表情で応えてくれます。
肝心なのは花を敬う気持ちです。
すべての命を尊び、花と一緒に綺麗なもの何か人をほっとさせるものをつくりあげる。
それがいけばなの究極の姿だと思います。　桑原専慶流家元　桑原仙溪

※入場料は京都市に寄付します

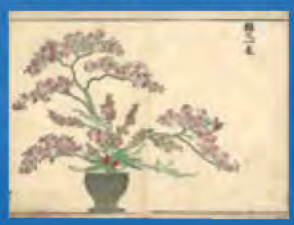
のうえ、お越しくださいますようお願い申しあげます。なお、会場の混雑状況により、お客様の安全確保のため、入場制限をさせていただく場合がございます。あらかじめご了承ください。

MARU

京都店
電話(075)211-8111

立花時勢粧３３３年

RIKKA IMAYOUSUGATA



開催情報をご確認ください→
www.kuwaharasenkei.com

新型コロナウイルス感染症の影響等、諸事情により本催事は事前に予告なく中止または入場時間が変更となる場合がございます。ご来場の際は、ホームページ等で事前にご確認

開催情報をご確認ください→
www.kuwaharasenkei.com

DAI

桑原専慶流いけばなテキスト704号　2022年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

「花の芸術」
立花時勢粧３３３年
桑原専慶流いけばな展

立花時勢粧３３３年（昨年）の節目を記念し、３月に流展を開催します。時代は大きく変化してきましたが、花と共に生き生きとした美を作ろうという気持ちは当時も今も変わりません。

コロナの対応としてネット上でも鑑賞可能にし、また今回の花展が社会の役に立つことを願って入場料収入全額を京都市に寄付します。多くの方にご覧頂ければ幸いです。　仙溪

素朴な味わい

＜12頁の花＞　仙溪

花材　照葉椿（椿科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶花器

素朴な味わいを作るのは難しい。地味すぎたり寂しすぎたりせず、シンプルなんだけどキラッと光る魅力がある花がいけられるようになりたい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
2月号
No.716

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

いちご狩り

＜2頁の花＞　健一郎

花材　冬苺（薔薇科）
　　雪柳（薔薇科）

花器　備前焼花器

妻の菜月とよくいちご狩りに出かけた。3年前にはその思い出を生けた花遊びをした事もあった。幼い頃よりいちごが好きで、親になっても変わらず、いまだに2人で苺を取り合っている。

山に出かけると菜月はよく、蛇苺（へびいちご）、木苺（きいちご）、冬苺（ふゆいちご）などを見つける。僕が肩車してなんとかもぎ取ることもあった。

冬苺は他の苺と比較して早く結実する。少し早くに咲いた雪柳と取り合わせた。見て楽しみ、食べて、生けて楽しむ。

花の出逢いと そのバランス

＜表紙の花＞　仙溪

花材　シンピジウム（蘭科）
　　葉牡丹（油菜科）

花器　フランス製陶鉢

いけばなの良し悪しは、花がいかに生き生きしているかによるところが大きい。そのように見えるためには個々の花を生かす技術を磨く一方で、花たちにその内なる魅力を発揮させるための出逢いを工夫することが鍵となる。

飴色のシンピジウムに白いハボタンを組みあわせて緑色の鉢にいけると、花たちが勢いよく輝きだした。

ここに別の花を加える必要はないし、それぞれの分量も丁度いいバランスだ。

暫くしてハボタンが大きくなったら、シンピジウムの葉を足すといい。

蘭の実

＜3頁の花＞　櫻子

花材　熨斗蘭（蘭科）
　　喇叭水仙（彼岸花科）
　　スイートピー（豆科）

花器　ドイツ製ガラス花器

珍しい蘭の実を葉とともにいただいた。ノシランだと思う。ノシランはキジカクシ科ジャノヒゲ属の多年草で暖地に分布する。ジャノヒゲと同じく庭の下草にされるそうだ。緑色の実は濃い青色に熟す。

球根のまま売られていた可愛いラッパスイセンには「テタテート」という名前がついていた。フランス語 tête à tête（頭と頭）は頭を寄せあってないしょ話をすることを言う。

蘭の実に合わせて小さくいけると、話し声が聞こえてきそうだ。

啓翁桜の生花

＜4頁の花＞　仙溪

花型　生花　草型　副流し
花材　啓翁桜（薔薇科）
花器　煤竹竹筒

ケイオウザクラは固い蕾でいけても必ず咲いてくれる。比較的撓めやすいので生花でいけることも多い。逞しく、頼もしい、とても有難い存在だ。

とはいえ、撓める時は「花が咲きますように」と祈る気持ちが大事だ。花が咲いてこそのいけばなである。

啓翁桜の立花

＜5頁の花＞　仙溪

花型　除真立花
花材　啓翁桜（薔薇科）
伊吹（檜科）
金葉小手毬（薔薇科）
満作（満作科）
椿（椿科）

都忘れ（菊科）
小菊（菊科）
鳴子百合（百合科）

花器　銅立花瓶

昨春の立花研究会で立てた立花。花屋で手に入る素直な枝で面白みのある花形を作るのは難しい。控枝のイブキ（ビャクシン）がいい味を出してくれた。

蝋梅（ろうばい）の季節

健一郎

花材　蝋梅（蝋梅科）
　　レリア（蘭科）
　　菜の花（油菜科）
花器　陶花瓶

家元の取り合わせたお花をいけさせてもらった。自分ではできない取り合わせだが、気に入っている。苦心したが見せたいところを見せることができた。蝋梅の実の殻が珍しく、落ちても枝に引っ掛け飾っていた。

よく僕が見にいく、早咲きの梅と同じくらいの季節に、蝋梅は御所で咲いている。寝転がって澄んだ冬の空と香りと色を楽しむ。数年前に、琵琶湖で見た大きな蝋梅が忘れられない。空と湖によく映り堂々としていた。妻の家族と出かけた時だった。義兄の操縦するドローンを目がけて走った。息が切れると大きく息を吸う。これほど蝋梅を吸った日もなかっただろう。いい香りだ。

水際除の立花

＜7頁の花＞　健一郎

花型　除真立花
「水際除」

花材　松（松科）
彼岸桜（薔薇科）
金葉小手毬（薔薇科）
伊吹（檜科）
児手柏（檜科）
紫花菜（油菜科）
小菊（菊科）
鳴子百合（百合科）

花器　陶花瓶

遠景に春の息吹を感じる立花になった。胴にひょこっと除く芽吹きも可愛らしい。立花でなくても表現はできるが、昔からこのように草木を味わい、季節を思っていたと考えると感慨深くいいものである。そうありたいものだ。

自分と自分

健一郎

12月7日午前1時59分にそれはそれは元気な産声が。

このご時世に幸運にも奇跡の瞬間に立ち会う事ができた。夫婦共に様々な治療を受け、産まれた待望の我が子である。特に妻と柊介は本当によく頑張ってくれた。

子供が産まれるとグループホームでは意識していた、自分が環境であるという認識を家庭内でも強く持つようになった。産前は全く気にもならなかった事を問題だと捉えるようになったのが変化である。

私は最大限、自分自身を大切にし、可愛がり、甘やかしてきたつもりだったのだのだが、それ以上の事をしたいと思える人が現れた。十分に自分が満たされていたと思っていたのだがまだ先に続く道はあったのだと驚いている。不思議である。

人から見られた自分を想像する事はあったが、子供が産まれると明確に見せたい自分でもある事に気がついた。そしてそれは、なりたい自分でもあった。つまり、僕はこのままの僕でいることが大切だということだ。

日本では、不思議な事に自分を指す言葉が相手を指すことにもなる事がある。自分という言葉や、僕は、私はという言葉も相手にも自分にも使うものの一例である。英語であれば「I」「you」ではっきりと別れており相手のことを「I」と呼ぶ人はいない。人を思うおもてなしの文化とも関わっているのかなと想像も膨らむ。自分がされて嬉しい事を人にしなさいという教育もよく聞くが関係がありそうだ。

色にしてもそういった曖昧な領域があるようだ。具体例としては、信号機の青色は、緑色だが、法律でも青色と表記されているらしい。青菜も葉っぱは緑色なのにも関わらず青色という。赤黒白以外の色は古代から平安時代頃まで「あお」色と総称されていたそうである。ある仮説によると、固定していない変化するあらゆる色はあお色だったらしい。この日本語の、日本の風土のあやふやさが僕は好きだ。自分も相手も、自然も関係なく全てが溶けたようにあやふやな世界が。心地がよさそうである。

漢字、ひらがな、カタカナを使い、ローマ字を使い、年末になるとお墓参り、クリスマス、除夜の鐘、年が明けると初詣、お年玉をこなす日本人が否定的に捉えられる事もあるが人と人の繋がりが強くなり、インターネットで世界が狭くなった今、私個人の感想としては悪い気はしていない。それぞれの文化を勝手な解釈で生活の中に落とし込み日々を楽しんでいるように見える。

お花に触れたことのない人が、お花に触れ、お花を家に持って帰ってもらえるイベントの機会をいただくことがある。お花でなくとも、お茶でも和歌もいい。その国の季節と風土と共に育まれ、時代と共に変化し続けながら残り続けるものに関心がある。特に衣食住は見ていて面白い。季節と共にあり、様々な工夫や遊びがそこにはある。その断片を少しでも人に伝えているうちに、将来は季節と共にあるような人達と共に過ごす事ができたら良いなと夢を見ている。一日を味わいながら丁寧に生きていくことが時代を追うごとに難しくなる気がしているが、それでは寂しい気がする。

「忘己利他（もうこりた）」とは、自分を忘れて他人のためにつくすことをいう。「己を忘れて他を利するは、慈悲の究極なり」と最澄は述べている。海の大きさを身をもって体感できるかと言われれば難しいのと似ている気がする。それだけの精神を是非とも身につけたいのだが、こう言っている間はまだその道は遠く、険しそうである。己を無くす事は他と溶けるということでは無いだろうか。私自身が追求したく思っている、花と溶けるというテーマとも密接に関わってくる。

己を忘れるほど自分を満たせば、他を利する心が芽生えるのではないだろうか。自分が良い状態でいなければその環境を、人を、花を生かすことは到底できない。これからも自分を整え、大切にし続けていき、自分がその環境、季節に抱かれながら在り続け、その実体験を人に伝えたく思っている。そこに自分と環境の区切りは無い。

自分が在ると言う事は曖昧で不確かなものなのかもしれない。

レモンも一緒に健一郎先生の立花を拝見。

除心立之内真之花形

花伝書を見る

立花　木蓮除真
除真の内真の花形
冨春軒
木蓮　伊吹　松　柘植
躑躅　小菊　樫木　枇杷
著莪　要
（立花時勢粧・上）

花形ばかりになってしまったと冨春軒は嘆いている。

昔の名人はあえて扱い難い真（の枝）を探し、工夫をこらすことで色々な花形を生み出した。それらは除真のうち行の花形と言い、花に自由を得て様々に景色を変え、人の心を慰めたと書いている。

この立花図には「近ごろ出された花伝書に多く載る花形」で「これ私の作意にはあらず」と添えられている。

除真のうち真の花形は仏前対の花に必ず用いる花形なので出し所や寸法に定めがある。そのため人に立花を教える最初の花形となったが、それゆえに今では立花といえばこの

この木蓮の立花は充分に美しいが、立花の醍醐味はまだまだこの先にあるのだよと冨春軒は伝えたかったのだろう。

神の柱・壱岐島

仙溪

正月明けに「天と地を繋ぐ神の柱」の名をもつ島を訪れて神社巡りをしてきた。

対馬とともに古くから大陸との交易の拠点として栄えた壱岐島（長崎県）。中国の歴史書三国志（3世紀）の『魏志』倭人伝にも「一支国」の名で登場する。『古事記』の国生み神話では5番目に生まれ、神々が行き来するための天と地を繋ぐ柱「天比登都柱」であると記されている島だ。島内には150社以上も由緒ある神社が点在し、280基の古墳に加えて弥生時代の遺跡も発掘されている。

南北17キロ、東西14キロの小さな島だが、ほとんどの食材が島内で賄える。海産物、農産物、畜産や養鶏、養殖によって自給自足が可能な恵まれた島だ。想像するに太古より交易の拠点であると共に、豊かな自然の恵みをもたらす神への祈りの場でもあったのだろう。

しかし人や物が行き来する場所は平和な時代はいいが、隣国が領土を広げようとした

内海湾の小島神社。潮が引いたときだけ渡れる。祭神は素戔嗚命。

シマカンギクとクロツバキ。

潮が引くと天然の牡蠣も現れる。島のおばさんが身を採り集めていた。

猿に見える「猿岩」は壱岐島誕生の神話によると島を繋ぎ留めた８本の柱の一つ。

過疎化で空いた畑ではバナナ栽培が。無農薬で皮まで美味しく食べられる。

島内のしめ縄にはヤツデの葉が。ヤツデには魔除けの力があるためか。

白沙八幡神社の鎮守の森は神秘的。写真は威厳あるイヌマキの巨木。

場合は侵略の犠牲にもなる。壱岐には女真族による刀伊の入寇（1019）と元寇襲来（1247・1281）によって蹂躙された苦しみの歴史がある。

しかし現在は自然の恵みに支えられた穏やかな島だ。神への祈りは今も引き継がれ、現職の神職のみで行われる壱岐神楽は秋から冬にかけて島中の神社で奉納されているそうだ。

今回の旅では壱岐の食材を堪能した。クロアワビ、サザエ、クエ、ノドグロ、ミズイカ、壱岐牛、ママなかせ（トマト）などなど。麦焼酎は壱岐発祥だそうだ。最近では地ビールやバナナ栽培も始まっている。

訪れた幾つかの神社では感謝とともに願い事もさせていただいた。断崖で強風を、砂浜で穏やかな波を、鎮守の森で巨木を体感したことも、神の柱の島を印象深くさせる。

目に見えないゆえに畏れ、目に見えないゆえに敬う。神とはそういうものなのだろう。命を育む自然の大いなる力に神を感じる。自然の恵みに感謝し尊ぶ気持ちを忘れずにいたい。壱岐島は神を感じる島であり続けて欲しい。

奈良・平安朝よりの白沙八幡神社、祭神は神功皇后、応神天皇他。拝殿は平戸藩主・松浦鎮信が寄進した36歌仙図に因んだ絵で埋め尽くされている。

先月号で紹介した松浦鎮信縁の地。これも何かのご縁。

島の東端、左京鼻から玄界灘を見る。壱岐島誕生の神話で島を繋ぎ留めた「折れ柱」の一つ「観音柱」が荒波に洗われる。海の向こうには宗像大社の境内地であり「神宿る島」沖ノ島がある。

桑原専慶流いけばなテキスト716号　2023年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

いけなおし

＜12頁の花＞　仙溪

花材　白文字（楠科）
　　桜草（桜草科）

花器　陶花器

先月号で水仙といけたシロモジが一ヶ月たっても元気なので、短くしてサクラソウといけなおしてみた。固かった花の蕾も膨らんで、数カ所咲き始めている。

さらに2週間が経ち、ほとんどの花が咲いてくれた（左の写真）。毎日私たちの暮らしと共にいてくれる。小さな花たちが健気で愛おしい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024年
2月号
No.728

編集発行　京都市中京区六角 烏丸西入　桑原専慶流家元

カトレアをいける

仙溪

五葉松（松科）
カトレア（蘭科）
オンシジウム（蘭科）
コルディリネ（竜舌蘭科）
金属花器

カトレアの原種は中南米の高地で樹上に根をはり、根で空気中の湿気を吸収して育つ。名前は2百年前に英国人カトレーがブラジルから英国へもたらしたことに因み、その後多くの品種がつくられた。蘭の女王と呼ぶに相応しい花だ。

カトレアは高山の樹木と相性が良いように思う。厳しい環境で育った物同士の品格がつり合うのだろう。ゴヨウマツととり合わせ、コルディリネをカトレアの葉の代わりに。小花のオンシジウムが優しく絡まる。

カトレアは茎が短いのでカトレアホルダーでいける。コルディリネの葉を1枚切って、ホルダーを隠している。

温もりの色

仙溪

雪柳（薔薇科）
喇叭水仙（彼岸花科）
金盞花（菊科）
陶花器

ユキヤナギの白い花に、黄色とオレンジ色の花を合わせて春を感じる盛花に。

ラッパズイセンの葉だけでは淋しいので、キンセンカの豊かな葉の繁みが有難い。まだまだ寒さ厳しい日もあり、温かな花色で長く元気でいてくれることに励まされている。

稽古の花　④

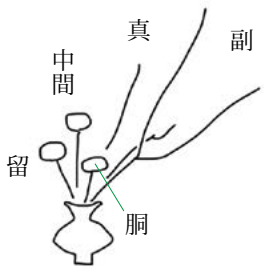
1月9日撮影　仙溪

啓翁桜（薔薇科）
スプレー菊2種（菊科）
陶花器

ケイオウザクラは1本を切り分けています。スプレーギクは小ぶりでサクラに優しく寄り添ってくれました。葉付きが少なめでしたが、3本で充分な繁みになりました。

撮影後2週間になりますが、サクラが開花し、キクたちもまだまだ元気で、目を楽しませてくれています。

（花代　1，300円）



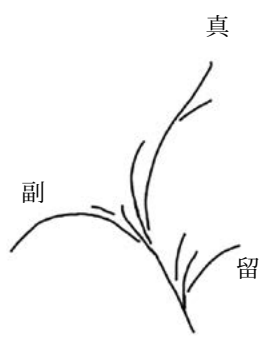
猫柳の生花

仙溪

猫柳（柳科）

竹筒

花穂の美しい猫柳。動きのある草の花型のうち、副を長く伸ばした「副流し」にいけた。数日後の写真なので、花穂が立ってきて可愛いらしい。



12ページの立花を、いけこみ前日に家で立て終えたところにメイちゃん登場。絶妙な位置でポーズをきめてくれました。

冬の香り

健一郎

黒文字（楠科）
卜半椿（椿科）
水仙（彼岸花科）
飴色釉陶花器

稽古でも好んで生ける取り合わせである。今年は水仙の本数を増やしてもらい、椿と水仙の2種で稽古した。今ぐらいの季節になると良い香りのお花が多く出回る。花の香りでは、水仙やフリージア、茎の香りでは、黒文字や、青文字、梅の、切った後の枝の匂いが気に入っており、伝えていると教室のみんなが香りを楽しんでくれている。今年、黒文字をいけた人から、名前が思い出せませんでしたが、切った時の香りで名前を思い出しました。と話があって、花を五感を使って心から楽しんでくれている姿に嬉しくなった。

主観と客観

健一郎

鶯神楽（忍冬科）
紅梅（薔薇科）
ヒマラヤ杉（松科）
陶花器

少し早くに咲いたウグイスカグラを梅と合わせてみた。春を思う冬の花になった。二枝とも葉のない枝にお花のみが咲いている。このように冬らしい姿の枝を、一緒に生ける事は普段は考えつかないが、2つの枝の反応をどうしてもみたくなった。柔らかくて柔軟性のあるウグイスカグラと強く上に伸びようとする梅。全く違うように見えていても、いざ写真になるといまひとつ、違いが分かりにくい。主観と客観のバランスが大切だと感じた。思っている良さを伝えるのはやはり難しいものである。植物園でいつもみていたヒマラヤスギを生けることが出来るとは夢にも思っていなかった。毎度、お花屋さんのお花を集める力に驚かさせられる。ヒマラヤスギが二枝の個性を尊重しながらも自らも強い主張をしている。他を生かしながら自分も生き生きとしている姿は格好いい。

同砂之物

花伝書を見る

松一色　砂の物
（冨春軒：初版）
松　晒木　苔木

（立花時勢粧・下　秘曲の図）

『立花秘傳抄』（立華時勢粧4巻～8巻）には、松一色について次のように書かれている。

「松の一色は祝言第一の花であり、また一色の一つである。移徙（貴人の引越し）の時には必ずこの花を指す。近頃初心の人にも相伝して、むやみやたらにこれを指すが、恐ろしいことだ。たとえ少々伝授したとしても、長年の巧者でなければ松の景気の妙なる所（なんともいえない美しさ）を瓶上にうつす（移す、映す）ことは難しい。たとえば筆道をよく相伝したとしても、修行に磨きをかけなければ文字の形は良くならないのと同じである。」

「松の一色は四季それぞれに立てると言うが、菊がようやく終わる頃から紅梅がやや咲く頃までこそ、松の一色が一番面白い時季である。〈神無月時雨にそめぬ松〉とは言うけれど、その一方で葉も黄ばみ霜にいたみ雪にうづもれて、色の変わった葉が出るのは、山も顕になり峰もさびしくなる頃のことだ。それなのに、この頃の人は春の末から秋のなかばまで変わらぬ色の松ばかりを瓶に集めて一色とする。それのどこに面白みがあるのだろう。松は彩りが第一で難しいものだと古人も伝えている。」

「松に苔、晒木を付ける時は、体用よく和合して一木の気色（様子、表情、風情、趣）をうつすべきで、このことは立花の最も大切なことである。晒木は高山の物だから、松の気色も年月を経て枝が垂れ、陰高き心を指すべきである。若松、みどり松には加減が必要。」

体用＝本体とそのはたらき。主体とその作用・属性。基本的な芸とそこから生まれる趣。

長い文章の引用となったが、要するに、立花においては

自然の風趣をうつす

ことこそ大切なのだと書いている。おそらく冨春軒自身が奥山に分け入り、松のなんともいえない美しさに魅了された経験を元にしての言葉だろう。

長い年月を経た松が、月明かりに陰高くそびえている。その姿のなんと神々しいこと。目をこらすと霜枯れた葉色や、白く光る晒木も混じる。その荘厳な美しさを瓶上にうつしたいと願う、強い思いが感じられる。

さて、この松一色・二株砂の物だが、「陰高き松」が見せる様々な要素を、目の前に低くギュッと凝縮させた感じがする。このような景色は実際には無いだろう。冨春軒の心の中で創られた空想の世界、仙境の風景とでも呼べばいいだろうか。独自の境地を感じずには居られない。

自然の「妙なる所」を自分なりに表現することを教えてくれている。

桑原仙溪　南天　松　杜松　梅　水仙　椿
小菊　枇杷

上野淳泉　松　蘭２種　伽羅木　柾木　千両　小菊

第７回 流枝会 立花研究発表会

立花研究会「流枝会」は13世家元の強い思いを受けて、当流華老の上野淳泉先生が長年指導してこられた。私も若い頃約10年通って教えを受けたが、今回恩師の立花と並んで出品できた喜びと共に、まだまだ花の道半ばであることを再認識させていただいた。

桑原健一郎　松　栂　伊吹　椿　菊　小菊
春蘭の実　苔木

イタリアン・ポピー

＜表紙の花＞　櫻子

イタリアン・ポピー（芥子科）
姫南天（目木科）
陶水盤

初めましての大きなポピー。福岡県の花卉生産者クレインフィールドさんが２０２０年にイタリアで出会い、３年後日本での栽培を可能にした品種だとか。ヒメナンテンで優しく緑を加え、イタリアン・レッドの器にいけた。花から力をもらえそう。

殻（から）は下から剥（む）く

桑原専慶流いけばなテキスト728号　2024年2月1日発行（毎月1回1日発行）桑原専慶流家元発行　定価五五〇円（消費税込）　www.kuwaharasenkei.com　いけばな作品写真：宇佐美宏

ジャパンスピリッツin京都
南天の立花

仙溪

会期　12月30日(土)～1月5日(金)
会場　JR京都駅ビル2F
南天（目木科）　白梅（薔薇科）
松（松科）　伊吹（檜科）
白玉椿（椿科）　水仙（彼岸花科）
譲葉（譲葉科）　小菊3種（菊科）
蝶耳銅立花瓶

JR京都駅ビル内の広場で、器に込藁を入れるところからいけあがりまでを約20分でご覧いただきました。

新春を寿ぐ気持ちを込めて立てた立花で、常緑のマツのほか、難を転ずるナンテンを主材にして、次の代へ繋ぐユズリハも加えています。

会期中、元日に能登で大地震がおこりました。厳しい寒さの中で不安な日々を過ごされていることを思うと胸が痛みます。適切な支援が行き届きますように。

斜め前から見たところ